

日蓮宗河合大僧正題字 日蓮宗風間權大僧正題字 日蓮宗北尾日大先生編著

聖誕七百
紀念出版

日蓮宗法要式

紫羽二重 七百頁
金文字入 七拾錢
正價金參圓五拾錢
十一月十日 特價金參圓十二錢

日蓮宗日蓮主義の實踐的方面に於ては信仰を根本とす。而して信仰の要は朝夕の勤行及び月次年次等の法要儀式を勤行するを以て第一とす。然るに古來完全なる法要信仰の書無し、著者之を慨すること十年、苦心研鑽の結果本書を著して此缺陷を補はんとす。第一篇常時法式には日課、週次、月次、年中の諸式を掲げ、第二篇特種法式には禮法華會、施飯鬼會、放生會、祈禱經、改宗式、得度式、晋山式、結婚式、葬儀等の諸式を示し、第三篇諸回向文には四十餘種を列ね、第四篇法華要品には二十品を載せ、第五篇信行要文には經前經後、唱前唱後六十餘文を選び、第六篇聖讚歌には一般讚仰歌及びコドモ會諸歌を集め、第七篇雜部には諷誦、歎徳、奉告、祝辭、帛祭文、七十餘例を挙げ、且つ附するに改名字選を以てす。凡そ本化信行法式の各方面を網羅収録して遺憾あることなし。願くば五千の住職者諸師、二百萬の信徒諸氏、五百の學生諸君乃至一般日蓮主義讚仰者諸彦、奮て一本を座右に備へられ、以て信仰の正軌、法式の指針に充てられんことを。

五大特色

- 一、本化組織宗學の見地よりして諸種の法要儀式を最善に分類し整理し且つ統一あらしめたる點。
- 二、法要信行に必要な法華要品圖書要文を編入して如何なる法式にも此一冊にて事足る様至極便利に編輯したる點。
- 三、年中行事三十八種特種法式三十餘種等の下一々に適當なる御書を選抜配合して日蓮主義を法式上に發揮したる點。
- 四、日課月次年次等の重要法式を一々具體的に羅列し以て費用に適切ならしめたる點。
- 五、率正的方面の新式も實行に適し傳統的方面の古式も亦非宗義ならざる機轉に注意を拂ひたる點。

發行所

京都市東洞院三條上ル
振替大阪一三〇六五番

平樂寺書店

目次

日蓮聖人を慕ふ……………	本多日生
本經祖書要文講義……………	本多日生
佛教と政道……………	本多日生
法華三聖に對する感想……………	井上哲次郎
世界的精神文明の寶庫……………	中村又衛
記事報道十數件……………	

第廿六年二月號

統一





時

言

日蓮聖人を慕ふ

本 多 日 生

四、我國の天職を明かにす

今一には我國の天職を明かにし給ひし上から日蓮聖人を慕ふのであります、大體日本人は國家觀念には富んで居つたのであります、今日は國家の理想が明かに分らなくなつたのであります、明治維新の當時に於ては西洋に對して西洋の文化に遅れを取らぬやうに、法律の上に於ても條約の改正をやらなければならぬ、又西洋の色々な物質的の文明を受容しなければならぬといふので努力を致しましたが、法律の改正が成立し、條約改正も出來上つて、今日に於ては、西洋の法律と日本の法律と大して違ひがない、醫學の研究としても、別段西洋の醫學者を連れて來なければ不安心だといふ事もなくつた、あゝ親父が死にさうだが日本のお醫者に診せただけでは足らぬからして西洋のお醫者を招ぼうかといふやうな考はなくつたせう、戰爭をするにしても、日本の軍人では危ないから獨逸の將校でも頼んで來たいといふやうな考がなくなつたせう、さうすると大體、西洋の文化の事に就

ては日本は先づ對等になつたといふ自信力がそこに起つて、これから先、何の目標に向つて進んで行くかといふ、國民が進み行く目標を喪つたのであります。進む目標を失へば、直ぐに頹敗が生じて來るのであります。十萬圓の金を溜めたら宜いと思つて、セッセと働いて十萬圓溜める、溜めてしまつたらそれから生れる利子を使はうと考へ、十萬圓になつた其日から努力は消えてしまつて、其の利子を以て飲んだり喰つたりする事になるのである。明治維新以來緊張して居つた國民精神は、たゞ西洋と對等、西洋と對等といふことを考へた、それが今は對等どころではない、露西亞と戦つて勝つた、もうどんな國と戦つたつても敗けはしない、亞米利加に幾等の軍艦があつたつて何でもない、幾らでもやつて來いといふ氣分になると、そこで心の頹敗が生じて來る、所謂理想が國民に缺けたが故に、日本人の力は抜けて來たのである、これは國家の天職を忘れた爲めに起る大失態であります。日本はたゞ西洋と對等となつてそれで終るべき國ではない、西洋から踏躰られてならぬのは無論の事であるけれども、たゞ西洋から均等ぢや〜と言はれてゐるべき國ではない。日本には國を建てた時からの大理想がある、それは日本の國の力に依つて、世界に眞の文明を建設し、世界に若し暖い所があるならば、日本の光りに依つてそれを照そう、世界に若し苦しめるものがあるならば、日本の力に依つてそれを救はふ、不正なる事を行ふものがあつたならば、日本の力に依つてそれを磨懲しやう、日本は天に代つて正義を行ふ爲に建てられた國家である、天に代つて憐れな者を救ふ所の國家である。

建國の精神は實に偉大なものである、何かうまい事をしやうぢやないかといふやうなケチな量見て出來た國ではない、神様を中心とし、神の未胤みよである皇室を戴いて、さうして我々の祖先が三千年間、心を協せてやつて來たのは、唯だ焼芋を喰はうとか、ぼた餅を喰うて樂に暮さうといふ爲めではない、この日本の國家を通ほして、どうか人類の幸福を増進しやう、世界の文化を擁護しやうといふ大きな理想と覺悟とがそこにあるのである、これは他の國が爲さつて下さればそれでも宜いやうなものだけれども、斯ういふ大きな目的を人に譲るといふことは出來ない、必然日本の成さねばならぬ事と決心して來た、若し眞正なる名譽の何たるかを考ふる時は、これが一番大きな正しい名譽であらう、他の國に依つて人間の幸福が保證せられ、他の國に依つて正義が保障せられて、日本がそのお蔭を受けるのであるならば、日本を擧げて或る意味の奴隷である、或る意味の捕虜である、それであるからして、日本の力に依つて、どうか光りを世界に與へ、正義を世界に行はうと考へた、これは考が大きい過ぎるかも知らぬけれども、神様はさうお示しになつた、荷が重い、可なり荷が重い、我が天津日嗣の御末は天地と共に窮りなく、萬代續いて行かなくては、この目的は達せられぬ、直ぐに出來なければ二千年でも宜い、三千年、五千年、將た一萬年掛つても宜いからして、この大なる目的を達成せよといふが、皇祖皇宗より與へられたる遺訓の中の一番大事な點である。この皇祖皇宗の遺訓を實現するには、どうしても日本が彌や榮えて、さうして毎日太陽が東より出て、世界を照すが如くに、日本の國が世界を照らさなければならぬ。

然るにこの國家の天職を實現する覺悟が國民の間にボンヤリして來た、大政治家を以て任ずる人の頭にも普通の考のみ動いて、内には日本人の物質的の慾望を満足せしめたら宜い、外には對等の條約を結んだら能事足れりといふやうに考へて、皇祖皇宗の遺訓が頭から消えてしまつた、堂々たる教育者の中にも、建國の大精神がハッキリ分らない、國を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚との聖旨を拜しても、深厚

とは深い厚いといふことぢやといふ位のこと、眞に生氣溼潤たる建國の精神が國民一般の間に忘れられて來たのである。こゝに大いに醒めて、日本といふ名の付いて居る以上は、お日様の光りが東から出て西を照すやうに、日の丸の旗を國旗にして居るのぢやから、この大自覺を明かにしなければならぬ。

これを最も能く教へたものは日蓮聖人である、古から定まつて居つたけれども、やはり疾くからその事が隠れてしまつて、源平の戦ひのやうな事が起つて、日本の國で兄弟喧嘩をするやうな事になり、平家が榮えて清盛のやうな者が出て、唯だ一門の榮華に耽つてしまつた、それを恨んで源氏が出てこれを倒したその次には不都合な北條が出て本家の源氏を倒してさうして天下を取るとか、それはさつぱり譯が分らぬ事になつてしまつて、畏くも京都の御所などはどちらにあるか門さへ分らぬ事になつた、おれは源氏だ、おれは平家だ、おれは北條だといふやうな事で、骨肉相食ひに至つたのである、そこで日蓮聖人は、馬鹿者共、氣を付け、汝等は何をして居る、源氏だ平家だというて天子様から見たら門番の夫ではないか、源平の戦ひといふものは犬と犬との闘ひだ、天子様を何と考へて居るかと言はれたのであります、その頃他宗の坊さんは澤山居つたが、色即是空、空々寂々と言うて居る、だからして何ともそれは氣が付かぬ、日蓮聖人はさうではない、佛様の教を稽いて見ると、最も理想的の國家と理想的の宗教が冥合して世界の中心を造り築くと言はれた、然るに一切經の中に於ては法華經、世界の國々の中に於ては日本國、法華經は八萬寶藏の中の第一の教である、日本國は八方の國に秀でたる國である、この理想の國家と、この理想の教とが合體して、茲に世界に光りを發現するのは嬉しいことである。自分の生れた國は日本國である、自分の奉ずる教は法華經である、法華經を信じ、日本の國の天職を明かにすること程嬉しいことはないと言ふ

て、「兩眼如瀧一身徧喜」と日蓮聖人は言ふたのであります。

これを考へたならば詰らない事に自殺をしたり、千葉の海岸から跳び込んで戀愛哲學などと言うては居られぬ、大日本國の天職を忘れるから戀愛哲學だの共產主義だのいふやうなものが出て來るのである、日本人は學問を以て世に立つとも、實業を以て世に立つとも、勞働を以て世に立つとも、宗教家として世に立つともこの日本の天職を實現するが爲の努力であらねばならぬ、それは軍人が國を思ふのも、實業家が國を思ふのも、宗教家が國を思ふのも、日本人である以上は億兆心を一にして世々其美を濟して來たのが我等祖先の美風である。それを日蓮聖人は最もハッキリ仰しやつた、日蓮聖人は「日は東より出て、西を照す」といふ言葉を理想として、自ら日蓮と名乗つて宗旨を開き、旭の森に立つて朝暾の昇るのを見て、あゝ目出度い事である、先づ日本を照し、而して此光りが世界に及ぶのである、日本而して世界、と言ひました、今でもよく世界の日本であるとか、日本の世界であるとかと云つてやかましく喧嘩して居りますが、何も世界を日本の勢力圏内に入れてしまふといふのではない、武力に依つて世界を侵略するのではない、法律的に日本の領土にするのではない、世界の富を奪つて來るのではない、こちらから光を與へるといふ事であるのです、若し學術的に云へば、倫理的統一と申してもよい、一番善いところの道德、一番善いところの宗教、一番善いところの文化を日本で發達せしめ、その光を世界に與へんとする、即ち向ふのものを奪はんとするものでなく與へんとする所のものである、日本といふ言葉は、光の本となつて光りを他に與へんとするのである、それを「日は東より出て、西を照す」と日蓮聖人が仰しやつたのです、それで日蓮と自ら名乗つて、旭の森に立つて、南無妙法蓮華經と唱へたまふた、こゝに日蓮主義が初めて起つたものである。朝

日は常に東より出て、西を照す、南無妙法蓮華經!!、これがエライことです、この精神が日蓮主義の生命となつて居る。それは私が全國を巡教した時でも、例へば千葉縣であるとか、山梨縣であるとか、法華の多い所へ行きますと、今日の悪い思想とか日本に不利益なやうな考は弘つて居りませぬ、南無妙法蓮華經、これが失せない限り、悪思想とか、危険思想とか、詰らない思想とか、この日本を危ふするやうな思想は、南無妙法蓮華經と唱へると悪魔退散といふ事になる、寔にこれは不思議な事でありませぬ、どうかこの日蓮主義を益々盛んにしたい、との點から日蓮聖人を新しい意味に於てお慕ひ申す次第である。

五、國民精神を振起す

もう一つは國民精神を振起する上から日蓮聖人を慕ふと申したのである、國民精神といふのは何か、これは愛國心であります、その愛國心の中に私は一種の神秘性を帯びて居るものが日本の國民精神だと思ふ、神秘性といふのは、藤田東湖の正氣の歌にあるが如くに、神州日本は天地正大の氣を吸収して居る所の國民である。

天地正大の氣 粹然として神州に國鍾まる

正大の氣といふものはどんなものかと云へば、これを形に象徴すれば

秀て、不二の嶽となり 巍々として千秋に聳つ

注いで大瀛の水となり 洋々として八州を環る

發して萬葉の櫻と爲り 衆芳與に儔たり難し

凝つて百鍊の鐵となり 銳利鑿を割くべし

蓮臣皆熊罷 武夫盡く好仇

此國誰か君臨する 萬古天皇を戴く

實に一種言ふべからざる所がある、天地正大の氣が不二の山となつて居る、秀てたる不二の山のやうなといふのはどんなものぢや、どんなと云うてこんなものだ、山か、山といふ譯ではないこんなものだ、洋々として八州を環る、何處だつて水はあるではないか、けれども違ふ、日本を取巻いて居る所の太平洋、日本海の水は違ふ、日本には櫻がある、外國にダリヤがあるといふやうな話ではない、發しては萬葉の櫻となり衆芳與に儔たり難し、一種特別なものがある、この信念が私は宜いと思ふ、その神秘的なる國民精神が凝つて現れるときに楠正成となつて、八百人の少數な部下を以て、北條の百萬と號する兵を打敗つて、南朝復興の事業を大成した、これが外國人にはどうしても分らない、北條の軍は百萬、楠公の軍は八百人、八百人と百萬といへば逆でも取つ組合になりはしない、今の軍艦は向ふが十八、こちらが十と云へば八の相違だけれども、百萬と八百とはどれだけ違ふか、九十九萬九千二百違ふ譯である、それほど違つても、遂に楠公は北條を撃滅して建武の中興を成し遂げたではないか、こゝに國民精神があるのである、出来ない仕事をやり遂げる、大石良雄が上野介を討取るときに、上野介は非常に用心をして居つた、淺野内匠頭が切腹をしてから、その家來が附狙つて居るといふ風評を聞いて、探偵を放ち自分の家は要害堅固にして、何處にも隠れ場所を拵へてあつた、あらゆる手段を盡して注意をして居つたけれども、由良之助は遂に敵を討つた、一力樓上に於ては、「敵を打つ氣はござらぬ」とかといふと「敵を打つなどいふそんな面倒な事は

御免」「それではこの肴を喰へ」と村上喜剣から章魚を足に挟んで出されて「有難く頂戴仕る」腐れ果てたる武士、ア、もう腸まで腐つてしまつた」と喜剣は嘆いたと云ふ、左様にして、而もその期日が来れば見事に上野介の館を襲うた、誓約したるものは四十七人の内一人の落伍者もなく、一人の遅刻する者もなくして、整然として裏と表から攻入つて、到頭炭小屋の中に隠れて居つた上野介を引出して首を掻いてしまつた、その出来ない所をやり上げる、一種神秘的な、他のものに於て及ぶべからざる所に國民精神が閃めく、これはもう敗けるより仕方がない、これはもう致方がない、腹を切つて死んだ方が宜い、これは首を吊るより仕方がないといふ所をば、それを生返つて来る所が日本人である、仕方がないから首を吊つて死ぬといふ事は、それは猶ても犬でもやる。今日世界の大勢から考へて、日本の地位がどういふものである、國防の比較はどういふものである等といふことを考へたら氣持の悪いこと夥しい、武力の擴張を競争すれば、向ふがドン／＼比例が高まつて行く、こちらが一艘拵れば向ふは二艘も三艘も拵へる、日本で鋼鐵艦を拵へるのに一年に一艘より出来ない、向ふは一週間か十日で出来るくらゐな力を持つて居るのである、今日制限して置いた所で、こちらは十年も止めて居つたならば、造船會社は皆倒れて無くなつてしまふより外仕方がない、職工を募集した所が、漸く職工が寄つて来るといふ時分に、向ふは船が新しく出来てやつて来る位のもので、丁度貧乏人の娘を嫁にやるのには、一枚の羽織なり、帯一本なり、簞笥一ツなり、母親が幾年か掛つて、マア古い簞笥でも之を買つて置かなければならぬ、この帯は安い十五圓だこれも買つて置かなければならぬ、それでなければ愈々嫁に行くといふ時に、嫁入道具を一度に揃へることは出来ぬが斯うして買つて置けばどうかかうか嫁にやれる、それをナニ嫁に行くかと決まつてから三越に誂へれば二

週間か三週間でチャンと出来るといふ、それはその時に金があれば宜いが、若し親父がグデン／＼に呑んで、女房の羽織まで呑んで居れば、チア嬢が嫁に行くといふ事になつても、三越に買ひに行く電車賃もないやうなことになる、これは軍備の事を考へても、經濟競争の事を考へても、又今日の民心の墮落、思想の變化、あらゆる事を考へても、日本の今日くらゐ實に嫌やな時代はない、本當に理窟を推して行つたらこれも失望、これも失望、これも失望、すべて失望、誠に日本の前途は唯だ暗澹たるものである。

そんならば之を何處から回復して来るか、經濟の回復でも、思想の健全でも、武力の頼む所でも、何を頼むべきかと云へば、私は先祖代々傳へた一種言ひ難きところの國民精神、無限大の力を發揮する所のものを持ち来るより外ないと思ふのである、それを持つて来なければどうしても結論は出て来ない、今日一通りの理窟などを述べて来た所で何もならぬ、覺めろと言ふた所が覺めはしない、月に卷頁を一個づつ、儉約したら鋼鐵艦一艘出来ると言ふた所で、なかなか卷頁一ツを儉約しない、一日一ツのが二ツになり、二ツが三ツになることはあつても、なかなか儉約はしない、そんならば女の人が差して居る指輪を、三ツある人が二ツだけ残して、一ツでも宜いからそれを國家の爲めに捧げて呉れ、と言つても、なかなか出しては呉れない、とても覺めないです、變な調子なのです、これを覺ますものは卓越せる所の人が出て、大和魂を發揮するより外はない、山に譬へれば富士の山の如く、花に譬へれば櫻の花が咲いたやうに、人に譬へば楠公や大石良雄の如き非常な大人物が出て、この民心を覺ますなければいけません、それに就ては私は日蓮聖人を渴仰するが良いと思ふ、大石良雄の大和魂は主人の敵といふやうな事では現はれたので、今どうも上野介の白髮首を取れと話した所が、ちつとそれは話が違ふ、例へば日本が何か酷い目に遭はされて奮起

するならば宜からう、例へば獨逸の爲めに日本がやられて、忌々しいからといふので復讐的なる戦を起すならば良雄の話が宜からうけれども、何も日本は別に叩かれては居らない、楠公は朝廷の爲めに逆賊を討伐するといふ事に依つて北條を倒されたのだけでも、今日の日本に於ては、別段北條のやうな逆賊がある譯ではないのである。

國民は何の爲めに覺めねばならぬかと云ふに、日蓮の叫びがよいと思ふ、思想の頹敗を憂ひ、外寇の迫れるを慨き「一切の大事の中に國の滅ぶるは第一の大事なり」、その國の滅びるは外敵これを滅ぼすのではない、國民の精神の頹敗よりして國家が滅亡し行くのである、それは教の滅びる事から起る、教紊るゝが故に人心紊れ、人心紊るゝが故に國家亂ると叫んで、教を正ふし、民心を導き、さうして國家の基礎を築かなければならぬと絶叫したのである。

それが鎌倉幕府の怒りに觸れて、日蓮聖人は迫害に遭ふたのである、所がこれが勇ましく神秘的なる大和魂と成つて現はれた、之に就ても私は楠公よりも大石良雄よりも日蓮聖人が頗る模範的だと思ふ、楠公は立派であつたけれども、終ひは淡川に於て討死して居る、大石良雄は敵の首を刎ねたけれども、やはり切腹仰せ付けられた、どうも日本人としてはまだ理想的でない、我々は尊氏を須磨の海岸に於て首を刎ね、その白髪首を提げて京都に歸つて来るやうでなければ日本人の意氣に適しなと思ふ、吉良上野介のやうな不都合な奴の首を刎ねて切腹を仰せ付かつて、それで有難うございますなどいふやうな事はない、日蓮のはいよいよ幕府が怒つて、首の座に据えた、首の座に据えたけれども、切ることが出来なかつた、茲に至つて日本人の血が湧かなければならぬ、松ヶ谷を襲ふた時にも、頼綱（頼綱）の一の郎黨少輔（少輔）なる者一番に驅

け來つて、日蓮の懐中せる法華經を取り、日蓮の頭を三たび散々に打つ、あとの侍共が法華經を或は踏にじり、或は身にまとい、斯く不都合な事をして日蓮聖人を擲め取つて行かうとした時に、「待てよ、日蓮を倒すは日本の柱を倒すものなり」と一喝した、「首切らるべき日蓮こそ臆してあるべきに、さはなくして、これは僻事なりと思ひけん、兵共色こそ變じて見えし」と、三百人の兵者共が「色こそ變じて見えし」とあるぢやないか、それからして八幡社殿の所に行つた時に、日蓮聖人が「暫し待てよ、八幡宮にも申すべき事あり」と言ふた時にもビックリした、その時にも驚いて何事かと思ふた、恐れて皆黙して居る、その時に日蓮聖人はしづ／＼と神殿の所に行つて、「いかに八幡大菩薩はまことの神か、なか／＼宜いてはありませんか、首を斬らるべき日蓮が斯くの如く精神の安定を得て堂々と正義を行ふ、いよ／＼首を斬る一段になつた時に、所謂至誠天を感動して、「月のごとくなる光物鞠のごとくに飛び來たる、太刀取眼くらみ倒れ臥す」依智の三郎直重はフラ／＼となつて倒れた、三百人の兵者共は或は馬の上にてうすくまり、或は大地にひれ臥すもありといふから、馬の上でアル／＼顛へて居たり、砂の中に頭を突込んだ奴もあるらしい、或は「一町二町はせのさぬ」とあるから、臆病な奴は坊さんの傍に寄るからこんな事になるのだ、早く逃げるといふので、一町二町はせ退いた、「近く打ちよれや打ちよれやとよばふれどもいそぎよる人もなし」と、これが私は日本の國民精神所謂天地正大の氣、粹然として神州に鍾ざる、秀て、不二の嶽となり、巍々として千秋に聳つと云ふ氣魄がこゝに現はれたものであると思ふ、藤田東湖は排佛家であつたから、日蓮の事は知つて居つても楠公と大石良雄を擧げて日蓮に及ばなかつたが、今は教育も進んで居り理解も進んで居る、淺野内匠頭の爲めに鬱憤を晴らすからというて、白髪首を提げて兩國の橋を渡つた話よりも、日蓮が

立正安國の精神に依り、惡道無道の北條を勤王の大義を以て責め、外敵の襲來に備ふべきを説き、國は法に依つて昌へる、正義の教を立てなければならぬと言ひ、惡道無道の北條の手に捕つて首の座に坐つても、「頸切るべくはいそぎ切るべし」と言ふたこの事蹟はよほど面白いではないか、私は日本人がこれに感激せずしてどうするかと思ふ、日本人の日本人たる本領を日蓮は表現して居るのである。

日本には傳教とか弘法とかいふやうな傑僧も居るけれども、今日のやうな思想の戦が始まつて居る時に、之を迎へて來て、果してどうなるか、成程、大石良雄も偉い、主人の敵を討つたから偉い、幡隨院の長兵衛も偉い、男の中の男と謂はれた人だから偉いけれども、この思想界の勇將として日蓮聖人を迎へて來ることを知らぬのは、チツとどうかして居る、日蓮は寸鐵を帯びずして六百本の刀に打勝つたが、この力がありさへすれば、十艘の軍艦を以て十八艘の軍艦と戦ふのは恐るるに足らぬ、この大精神に蘇らねば軍備縮少の話がどう定まつても、亦他の事がどう定まつても、誠に頼り少ないことになる、この國民精神を振起し、日蓮を學んで一人でも六百本の刀に打勝つ、この天地正大の氣、粹然日本に鍾まる、この大和魂を喚び起しさへすれば日本の國の前途は春の如くに洋々たるものである。これ一つを失つたならば、百の議論も學説も、そんなものは何にもならぬ、日本の頼るべきものは唯一つある、即ち建國以來傳へ、三千年來鍛へに鍛へ上げた所の、或は楠公に現はれ、或は良雄に現はれ、殊に勇ましく日蓮に現れたる精神である、こゝに私は新しい意味に於て日蓮聖人を慕ひ申さざるを得ないのであります。

尙ほ他の方面からも考へることが出來ませうが、私は今日この五つを以て「日蓮聖人を慕ふ」といふ講題を説明申上げたのであります、元來が日蓮聖人の本地は上行菩薩であつて、只今拜讀した法華經にある

通りに「難問答に巧みにしてその心畏るゝ所なく」この菩薩は思想の戦の勇將として現はれた菩薩である、觀世音菩薩などは三十三身に顯現するといふやうな事はあるけれども、「難問答に巧みに」といふことはない、この菩薩は如何にも面白い菩薩だ、他の菩薩は例へば地蔵様などは塞の河原に石を積んで罪を救うてやるとか、色々ある、來世の救済には優れて居らうけれども、かういふ點は駄目だ、「難問答に巧みにしてその心畏るゝ所なく、忍辱の心決定し、端正にして威徳あり、十方の佛の讚めたまふ所なり」といふ、如何にも日蓮は思想戦の勇將として派遣せられた菩薩であつて、日本が思想界に於て今日苦しんで居る時代に、日蓮聖人を想ひ起すのは必然の關係が存して居るのであります。

これを以て謹んで我が日蓮大聖人の鴻恩に報謝し奉る次第であります。





本經祖書要文講義

本 多 日 生

七、警 策

警策篇は既に信仰の有る者に對して警めとして示されて居る要文を抽出したのであります。信仰の定まつた上にも尙ほ注意をして行かなければならぬのでありますから、さういふ教訓の中から適切なと思ふ所を茲に掲げたのであります。

五四、勸發品 若し善男子善女人四法を成就せば如來の滅後に於て當に是の法華經を得べし、一には諸佛に護念せられ、二には諸の徳本を植へ、三には正定聚に入り、四には一切衆生を救ふの心を發せよ、善男子善女人是の如く

四法を成就せば、如來の滅後に於て必ず是の經を得ん。

この「勸發品」は再演法華と申して、法華經の義理合を纏めて再び述べて呉れといふことを普賢菩薩が願ひした時に、佛が概括して法華經とは斯ういふ意味だと言つて説かれたのが、この四法成就の文である。それは「一には諸佛に護念せられ」るで、佛に護られるといふことを信じて居らなければならぬ、諸佛と言へば總ての佛であるけれども、これは善量壽本の起意から言へば諸佛は本佛に統一せられるのであります、たゞ「勸發品」は還述流通と申して進門の釋に還つて居る點があるので、それはどういふ譯かといふことに就ては、古來種々その理由が説かれて居るのであります、日蓮聖人はやはり「開目鈔」にも「涌出、善量の二品を除いては皆始成

を存せり」と言はれた、それは斯ういふ風に本佛に護念されると説くべき所を、諸佛といふやうな言葉のあるのは、釋尊を諸佛と肩をならべた佛と見て居るが故に斯ういふ言葉が出て來るのであるから、涌出、善量の二品を除いては始成正覺の佛、即ち諸佛と肩をならべた意味になつて居る。その點は顯本の本佛に約して解釋すべきだといふのが日蓮教學上の定則であります。故に諸佛に護念せられるのは本佛に護られて居ると考へなければならぬ、さう解釋するのが日蓮主義的法華經の見解として定まつて居ることナンであります、その本佛に護られて居るといふ意識が第一の要件である。第二は一諸の徳本を植へるといふことで、徳本といふのは「徳は本なり」といふことで、總ての道徳を指すのである、その本に對して「財は未なり」とかいふやうに、他の事

柄は道德から見ては末の事ぢやといふので、今日の言葉にすれば道德を徳本といふのである。だから諸の道德を植えて實行をするといふ其處に法華經があるのである、第一は宗教信仰の中心を本佛の加護に置き、第二は道德的觀念および實行に置いて、法華經といふものは、さういふ意味に於てその人の手に入るのである。第三は「正定聚に入り」とあります、これは正しき教に依り正しき精神の決定して居る仲間といふことで、所謂團結である。大事を行はんとするには個人々々が分立したのでは到底いけないうてである、國家が必要といふのも團結の上に於て必要があるのである。それは形の方から作つた團結であるが、精神の方から作つた正義の團結を佛教では正定聚といふのであつて、日蓮の立正安國の如きは國家を擧げて直ちに正定聚としたい、國それ自身

が正義の貫いたる集團であるといふことにしたいといふのがその本旨であつたのであります。そこに達する迄は「日蓮の類、日蓮の類」といふことを能く言はれる、それは最早や法華經に依つて淨められ、日本の天職に眼覺めたものを指すので、正義の團結に加盟して協力して教の爲にも國の爲にも盡して行かうといふのが正定聚に入るといふことである故に日蓮聖人は異體同心といふ事を主張せられて、飽く迄も正しき者共が私心を擲ち、小さな事業を擲つて協力しなければならん、それにはその中心となるべきものは本佛に護られて居るといふ事、諸の徳を實行しやうといふ意味に一致して行かなければ協力することは出来ない、正義の團結の中心思想は、前の一と二に擧げたる事が正義團結の根本觀念であるのであるから、この二つを除外して置いてもそこ

に正義の團結があるといふことは言へない。第四は「一切衆生を救ふの心を發せよ」——これは總てのものを憐み救はうといふ慈悲仁愛の精神を起すことである、諸の徳本の中には無論あることだけれども、特に之を取出してこの慈悲仁愛の精神が大切だから別出するのである、總別といふことは、特に大切なものを抜き出していふことが出来るのである。斯の如く洵に明瞭な教である「法華經とは何ぞ」と人が尋ねた時には、この文を擧げて答へさへすれば、法華信仰の意識を明かにすることが出来るのであるこの大事な聖教に違反した時には法華行者とは言はれない。さうさへすれば如來の滅後に於て法華經がその人の所有になると説かれた、日蓮聖人が「他の者は口に法華經を讀めども心に讀まず、心に讀めども身に讀まず」と言はれるのは斯ういふ意味から起

ること、この經文を幾ら口の上に讀んだ所が何にもならぬのである、「諸佛に護念せられ」と言つても護念せられることを信じない、「諸の徳本を植え」と言つても事實徳行を植えないといふことになつたらば何にもならん、口に言うて居るさうして精神が教に反して居る。今迄の法華坊さんの大部分が、唯だお經を捧讀して少しもその經意に徹底しないやうな風が餘程強くなつて來て居るが、これは全く今後の宗教としては大改革を施さんければならぬ點であるそれは讀むのは宜いけれども、讀む事さへ知れば足れりといふことは言へない、その義の有る所を了解して進んで行くことにならねばいけませんと思ふ。これは信者の警策として、信心をしてもこの四つの事柄に違反して居るか否かといふことを反省して、自らの態度を極めて行かなければならぬものである。

五五、序品 佛是の法華を説いて衆をして歡喜せしめ已つて、尋て是の日に於て天人衆に告げたまはく、諸法實相の義已に汝等が爲に説きつ、我れ今中夜に於て當に涅槃に入るべし、汝一心に精進し當に放逸を離るべし。

次の「序品」はこれ亦非常な警策であつて、佛が法華經を説き已つて、總ての者が歡喜に満ちて居る諸法實相の義といふ真理に關する事柄はすべて説き已つて、最早や説くべきものが無いから今夜涅槃に入らうと思ふ、併し最後に訣別に臨んで言ふ事がある、それは「汝一心に精進し當に放逸を離るべし」如何に結構な法華經があつたからと言つても、放逸にして懶怠の精神になつた時には、到底法華經

は何の役にも立たないものである、それ故に法華經の教とさうして活きた活動が伴つて、初めて法華經は利益を生じて來るものである、何處までも精進奮勵する所の氣分が法華行者には無くてはならん。他にも斯ういふ教訓は多々ありまして、不憚意と言つて憚意を起さないやうにしなければならぬといふ事がある。日蓮聖人も、今日佛敎の中に居て僧侶と成り、而も遊惰なる生活をする者は外道波羅門の徒であると言はれ、その甚しきは「徒に遊戯雜談のみして明し暮さんは法師の皮を着たる畜生なり、法師の名を偷める盗人なり」と迄言はれて、實に痛嘆されて居るのである。聖人の一代の化導に見ても實に奮勵努力を繼續せられたのであります、法華經は左様な活動的精神を鼓舞策勵して居るものである、そこに吾々の忘るべからざる警策を認めるのである

五六 松野殿御返事 世の中ものうか

らん時も今生の苦さへかなしし、況や來世の苦をやと思召ても南無妙法蓮華經と唱へ、悦ばしからん時も今生の悦びは夢の中の夢、靈山淨土の悦びこそ實の悦びなれと思召し合せて又南無妙法蓮華經と唱へ、退轉なく修行して最後臨終の時を待つて御覽せよ、妙覺の山に走り登つて四方をきつと見るならば、あら面白や法界は寂光土にして瑠璃を以て地とし金の繩を以て八の道を音界へり、天より四種の花ふり虚空に音樂聞えて、諸佛菩薩は常樂我淨の風に

そよめき娛樂快樂し給ふぞや、我等も其の數に列りて遊戯し樂むべき事はや近づけり、信心弱くしてはかゝる目出たき所に行くべからず。(遺文録一五二七)

次の「松野殿御返事」の聖訓も、實に能く整うた警策であらうと思ふ。この人生を渡つて行く上には心配な事もあるけれども、その心配な事があるから信心が出来ないといふことはいかん、その憂ひ悲しみの中にも信仰を發揮して、人生に於てさへもかゝる苦はあるものだが、況してやこれが一步誤つて餓鬼地獄の境界に墮ちたならば、この幾千倍の苦であるかも知れないといふやうに考へて、現世の苦が刺戟となつて信仰を鞭撻し、又喜ばしい時にも、人生に於ても斯の如く喜悅があるが、併しこれは眞の解脱

をしない瞬間の喜悅として消え去る、眞の喜悅は靈山淨土に行つて眞實不滅の覺を開いた時であると思つては、喜悅に觸れる時にもその中に南無妙法蓮華經と唱へる、斯く苦にも樂にも如何なる場合にも之を信仰の糧として、唯だお經から信心を得るとか、教訓から得るといふだけでなくして、實際生活の事々物々に於て信仰を策勵して行かなければならぬ。これは陽明學でもこの事は非常に重きを置いて居るので、何時も心だけから精神を磨かうとはするけれども、過つて行くのであるから、故に事物に觸れる時に一々その精神を磨けよと言つて居る、軍人の教育にもさういふ事が教育令にあつたやうに思ひますが、實に大切な事であると思ふ。斯くして退轉なく修業を繼續し、最後臨終の時に至るならば洵に喜悅ばしい境界に上る事が出来る、その光景はこの文章

にあるが如くに、如何にも美しく示しになつて居る「常樂我淨の風」と言へば、眞に結構な覺に上つたのであつて、人生の狀態の反對を教へて居るのである、人生は無常である、何時死ぬが分らん、何時愛して居る者と別れるか知れんけれども、佛の境界に至れば常住不滅にして再び滅びると云ふことはない。樂も人生の樂があるかと思ふと直ぐ苦があるといふやうな譯で、中々人生の思ふやうに樂みを續けることが出来ぬ、且つその中に罪があつたりするけれども、穢れなく續いて行くのを金剛樂と稱する、他の事に破壊せられない樂みが得られるのである、人生の樂みは破壊される、名譽を得て喜んで居ればまた失ふ事に依つて破壊される、子供があつてそれに喜びがあると思つても、子供が死んで破壊される、何事でも樂みと思ふたことが却つて後には悲

みの種になつて居るのである、それは破壊される樂みであるが故に決して眞の幸福を意味しない、一時々々遷り變つて行くので「樂は苦の種」といふやうなことになつて行く。然るに佛の境界の樂みはさうでなくして、益々その樂みが結構な意味を有つて行くのである。これから「我」といふ事は他に壓迫されない、不自由といふことの無いのを「我」といふので眞の自由を指すのである。その自由も今の世間ていふやうな法律の問題から起るのではなくして、すべて煩惱とか惡業の障が無くなつて眞に自由自在の境界に上ることをいふのである。「淨」は清淨にして穢れなく、人生のやうに間違つた方から行かない、何時でも清い正しい方の意味から行くので、これが佛の境界の言ひ現はし方として洵に大切なことになつて居る、それは風に譬へたらソヨ／＼と常樂我淨

の風が吹いて春の園に遊ぶやうな気分になるといふ佛の境界を斯の如く具體的に説明したことが、これ亦日蓮主義である、悟つたならば無念無想といふやうに禪宗などといふのは違ふ、又淨土門のやうに「花が咲いて居る」と言つても唯だ感情的にいふのは違ふ、哲學的の理智の満足の上にこの情操の満足を書いて居るのである。吾々もその數に入つて樂む日が近きにある、この「近づけり」といふことが宗教の力である、世間の方から言へば一日經てば一日人生は縮まつて行くのである、落つて考へて見たならば一日一日、段々に定まれる壽命が短縮されると思へば洵に氣持の悪い事であるけれども、その人生の終りの其處は直ちに常樂我淨の境遇に續いて居る、時計の一秒々々の刻む音は、吾をしてその大果報の方に近づけつゝあるかと思へば、洵に喜ばしい

境界である。併し其處に行くには信仰が確實でなければならん、法華經に依つて居るからと言つて、それを空頼みにしても、自分自身の信仰が弱かつたならば、この尊とい境界に上ることは出来ない。この最後の句は警策の最も強い言葉である、昔から法華の説教者は一番終ひに之を言うたものである。唯今まで述べた所に依れば法華經の利益は鮮かであるけれども、但し信心弱くしてはかゝる目出たき所に行くべからず」といふ事は、説教者が最後の警策の句として誰も唱へて來たことである。これと似た言葉が他の遺文にもあります。

信心弱く候へば空の雨の大地に墮ち、嶺の石の谷に轉ぶと思召せ、その時日蓮をば恨みさせ給ふな、返す／＼も各々の信心に依るべく候なり
これも説教者がよく説教の終りに一段聲を張上げ

戰に恐をなさざるは少なきが如し。

(遺文錄一五二七)

次も同じ御書の言葉であります、これも亦洵によく警策の意味が現はれて居るので、茲に出て居る警策は釋尊の説かれた事で、華嚴經にあつたかと記憶して居りますが、菩提心の場合に釋尊が説かれた事である。一時の發心は出來ても繼續が難かしいので、菴羅樹の花が美しく咲いても實を結ぶのは少ない、魚が澤山子を産んでも成長するのは少ないやうに、途中に於て信心を退轉して丁了者が多いのである。それはこの人生のならひ惡縁があつて、それが爲めに誘惑に依つて、自分は貰かうと思ふても己むを得ない事情が起つてそれを破るようになるのである。丁度譬へて見れば鎧を着た兵者が澤山あつても愈々戰場に臨めば恐怖心が起つて來るやうなもので

て言つた言葉でありまして、どんな善い事を聞いても有難い感じになつても、最後のこの警策を忘れた時には何にもならんから、非常な喜びを誦つた結句に持つて行つて、信心弱くしては此處には行かれんぞと言はれた事を振返つて、自分の信仰に鞭撻を加へて行かなければならぬ譯である。

五七、松野殿御返事 魚の子は多けれども魚となるは少なく、菴羅樹の花は多くさけども葉になるは少なし、人も亦此の如し、菩提心を發す人は多けれども退せずして實の道に入る者は少なし、都て凡夫の菩提心は多く惡縁にたほらかされ、事にふれて移りやすき物なり、鎧を着たる兵者は多けれども、

ある、始めから戰爭を怖がつて居る譯ではないけれども、實際に觸れると鍛錬しない精神は恐れを生じて來る。自分も信心を通ず積りては居つたけれども事實に觸れる時退轉の心を生じて來るのである、それはいけない、軍人なれば鎧ばかり着て威張つても駄目であらう、實際火花を放して戦ふ時に勇往邁進しなければならぬ、いくらお寺に詣つても、佛壇の前で信心する顔をして居つても、實際の事に觸れた時に信仰の力が發揮されなければ駄目であると言はれた。この文章も洵に華やかであつて、讀んで感興の多い聖訓であります、警策としては適文であると信じて抜いたのであります。

五八、佐渡御書 師子玉の如くなる心をもてる者必ず佛になるべし、例せば日蓮が如し、これおこれるにはあらず

正法を惜む心の強盛なるべし、おごる者は必ず強敵に値ておそるゝ心出來するなり、例せば修羅のおごり帝釋にせめられて無熱池の蓮の中に小身と成つて隠れしが如し、正法は一字一句なれとも時機に叶ひぬれば必ず得道あるべし、千經萬論を習學すれども時機に相違すれば叶ふべからず。(遺文錄八二八)

次の佐渡御書は、信仰の中には勇氣が無いと貫くことが出來ない所以を告示しになつたので、師子王のやうな心を有つて居る者でなければ佛に成り得ないといふのは、如何に正しい心を有つて柔順であつても、強くなかつたならば途中で破られてしまふ、「信仰は羊の如し」といふ事を能く言ふ、又一幼兒の

母に隨ふが如し」といふけれども、その幼兒のやうな信仰、羊のやうな信仰だけでは佛に成れない、定め得た信仰を維持する點には師子王の勇猛なるが如き決心を要するのである。それには日蓮を手本にせよ、これは日蓮が驕つて慢心して言ふのではない、日蓮の一代の經歷を手本にさへすればマゴつくことではない、如何なる迫害が來ても一毛髪だも日蓮は動搖しなかつたが、この模範の日蓮がある以上は、汝等之を學べ、茲に實に日蓮聖人の確信が現はれて居る、「例せば日蓮が如し」と實に單刀直入である。これは慢心から出たのではない、正法を惜む心の盛なる爲で、どうぞして教を弘めたい、それを信する者に眞の利益を得せしめたいといふ眞面目なる精神から考へる時、他の者を引く必要は無い、日蓮に學べといふ一語より外ないと仰せられたのであります。

それは若も日蓮が驕つて慢心から言ふのであつたらば、迫害があつた時に屁古垂れてしまふ譯である驕る者は強い敵に出會つた時は必ず恐れる、驕るといふことは弱い者に對してやることであつて、犬でも、えらい顔をするのは弱い犬に對してやるのである強い犬がやつて來れば直ぐ尾を捲いて逃げてしまふ例を引いて見れば修羅が非常に威張つて居つても、帝釋天に攻められると無熱池の蓮の中に小さくなつて隠れてしまふやうなものだ。日蓮がさういふ態度を取つたかどうか、如何なる強敵が現はれても一點憶した事はない、心にも形にも日蓮を以つて憶病者とは言へまい、臆病でないのは慢心から出たのである、正義を確信したる正しき信念の發露であるが故に、決して恐れを懷かなかつたのである。尙ほ注意すべきは正法は一字一句でも時機に適ひさへすれば

得道が出来る、現在にも利益がある、未來にも佛に成れる、併し如何に正しい法だからと言つても時機に適せなければ駄目ぢや、その時代を觀、機根を觀實際の必要に當嵌つて居らん時には、千經萬論を習學したからと言つても何の役にも立たない。時機に適合するといふことは功德を積むに就ても考へなければならぬ、その事がどうしてもなくてはならぬといふ仕事を擔任すれば、その功德は多いのである、河に橋が無くて、人が交通するのに不便を感じて居る、どうしても此處に橋を架ければならぬといふ時に、橋を架けたならば非常に功德が多い、けれども例へば今日の隅田川のやうに幾つも鐵橋も架かつて居る、船もあるといふ時に、何でも橋を架けたら宜からうと言つて無駄に橋を架けた所が何にもならん、其處にその事を擔任して困難な事でも遣り遂

けることに依つて、多くの者が救はれるといふ實效ある事をやらなければならぬ。この遺訓から考へ來る時には既に六百數十年を隔つた今日、世間の種々なる變動を経て居るのであるから、活きた意味に日蓮主義を發揚せんとするには、十分に時代を理解し時代に適合したる方策を確立して進まなければならぬ譯である、根本の事は變るものではないけれどもその活用に於ては時代を理解しなければならぬ。さうして教は根本も大事だけれども活用も大事なんである、根本々々と言つて活用を無視したるものは、醫師が病理のみを重んじて病人に對しては藥を誤るが如きもので、それは如何に學者であつても何にもならぬ、學理も大事であるけれどもその病人に對して適當なる藥を與へるといふ、所謂應用をば宗教は大切にしなければならぬ譯である。

五九、治病鈔 止觀に三障四魔と申すは權經を行ずる行人の障りにはあらず今日蓮が時具さに起れり、又天台傳教等の時の三障四魔よりもいまひとしほまさりたり、一念三千の觀法に二つあり、一には理、二には事なり、天台傳教等の御時には理なり今は事なり、觀念すてに勝る故に大難又色まさる、彼は迹門の一念三千、此は本門の一念三千なり、天地はるかに殊也こと也と、御臨終の御時まで御心へ有るべく候。

(遺文錄二一〇三)

次の「治病鈔」も、いろ／＼な妨害が起つて來る

けれども、その迫害とか妨害といふものには破られないやうに、最後の最後まで信仰を貫き通さなければならぬといふ事を言はれたので、天台の「止觀」に、愈々修行の效を積んで立派な所に行かうとすれば、三障四魔といふ妨害が起つて來るといふことが書いてあるが、それは今日蓮に於て正にこの三障四魔が現はれて來て居るのである、天台、傳教の時にあつたけれども、それよりはもつと強い意味に於て現れて來て居る。それは何故かというとな念三千の觀法に二つある、一つは理であり一つは事である天台、傳教の時は理である、理といふは自分が冥想をして唯だ坐禪でもして、一念三千の妙理を觀念して居るのだから、暗い本堂の隅でやつて居つても事が濟んだ、今の一念三千は唯だ個人的に冥想をして居るのではない、その大精神を實際に應用して、世

の中に活動を起すのである、即ちその一念三千が「立正安國論」となり日蓮の一代の經歷になつた。日蓮聖人はいろ／＼の事實に對して「これ一念三千の理なり」といふことを言はれる、蒙古が襲來して來ても、それに對して一念三千を應用し、日本の國狀の變化に對しても皆應用される。一念三千といふ事を面倒に言へば長いけれども、簡單に言へば「斯の如き事には斯の如き結果がある、この事が既に現はれて居る以上は續いて是れが來る」といふ事であるから、斯の如き有様になつて居るのを、之を打捨てたら斯うなるぢやないかといふ時に、一念三千を活用するのである。唯だ一念三千は原因結果の關係から若くはそれが相互に關係聯絡があるとかいふ筋道を教へるのではなくして、その原理を應用して、それであるから斯うしなければならぬといふ實際問題に

入つて行く、さうなると迫害が多くなつて来る譯である。國には正しき教を立てなければならぬといふ事を個人が本堂の隅で考へ込んで居るだけならば何も迫害が来ない、併ながら正しき教を本にしなければならぬといふことを實際に現はさうとすれば、其處に衝突が起り迫害が起るのだ。天台の時は理であり、日蓮の時は事である、一念三千の意義を實際問題の上に實現せんとするの時なるが故に、觀念が既に違つて居る、實行のになつて居るが故に「大難又色まさる」で、種々の迫害が起つたのである。「彼は迷門の一念三千」である、個人が理觀的にやる冥想のなるものである、今日蓮のは本門の一念三千であつて、實際問題にその意義を應用して行くのであるから、其處が天地はるかに違つて居るといふのである。この大事な點を臨終の時までお忘れなすつては

いけない。それ故に日蓮主義者は法華經の精神を實際化して行くのである、實際化の上には迫害があるけれども、そこに奮闘を續けて、最後命に及んでも退かぬ、そこに功德が積まれて佛にも成れるのだといふ事を忘れぬやうになさなければならぬ。これは富木殿に送られた御書でありまして、モウずつと晩年殆んど聖人の最期に近い時で、有力な事を仰しやつた文章としてはこれが聖人の絶筆の書と言つても宜いのである。その中に斯く仰せられて居るのであつて、古來この「理」とか「事」とかいふことに迷うて種々混雜な事を言つて居るけれども、それは私が今解釋した意味が宜いと思ふ、けれども古來私が申すやうに解釋した人は殆んど見當らんのて、之を何かやはり哲學的の議論で「事」といふは形の有るものゝ上に於て互ひに具はり合つて居るとかいふ

やうなことを言つて居るけれども、その原理を實際の問題に應用して實行して行くといふ意味が「事」であると私は考へて居ります。

六〇、種種御振舞御書 各々思ひ切り

給へ、此身を法華經にかうるは石に金をかへ糞を米にかうるなり、佛滅後二千二百二十餘年が間迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、南岳、天台等、妙樂、傳教等だにもいまだひろめ給はぬ、法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始めに一閻浮提にひろまらせ給ふべき瑞相に日蓮さきがけしたり、わとうども二陣三陣つゞきて迦

葉阿難にも勝ぐれ、天台、傳教にもこ

へよかし。(遺文録一三八八)

最後の「種種御振舞御書」は、聖人が龍の口の法難に先立つて弟子信者に對して決心を促がされたので、これきり頭を切られてしまつても宜いといふ確信をしたその時に於ける最後訣別の教訓である。不思議に頭が切れなかつたけれども、頭が切ないことを何も日蓮が豫想して居つた譯ではない、頭切られるものと思つて行つたのである、一面には不思議の利益に依つて助かるかも知れんといふことはあるにしても、一面はモウ頭を切るべきものなりと思つて居られたのであるから、そこで最後訣別の教訓として門下に與へられたことゝすれば、是れ亦吾等の印象して忘れてならぬことであらうと思ふ。「各々思ひ切り給へ」——それは正しき信仰を買か

うとするといろ／＼の事が引つ懸つて来る。「この事をどうしたら」あの事をどうしたら」といふことになるけれども、そんな事に一々引懸つて居つたならば逆もいから、總べて思ひ切つてしまへ、今命が無いと考へた時にはどうすることも出来ないやないか、この「思ひ切り給へ」といふ事は非常に大事な點である。これは法難迫害が無くても、最後も互が臨終の日が来た時にも、この思ひ切り給へと言はれた日蓮の聖訓を胸に浮べて——それは爲し能ふ時にいろ／＼爲るのは宜いけれども、最早や自分が終りに近づいた時、どんな妄想を浮べても何の役にも立たんから、淨き信念に立つて萬事を思ひ切つて淨い臨終を遂げなければならぬ。併し茲は左様な壽命の終りが来たといふのではない、自ら進んで法難迫害の衝に立つて、軍人が戰場に立つて彈丸の前に

進むが如き場合であるから、今や一切の事を思ひ切つて決心覺悟をしなければならぬ。此身を法華經にかうるは右に金をかへ糞に米をかうるなり」と、この我等の凡身は左様に貴とい物ではない、然るに佛滅後二千二百二十餘年の間、迦葉、阿難、馬鳴、龍樹、南岳、天台、妙樂、傳教等も未だ弘めなかつた法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字を未法の始めにこの全世界に弘むべき瑞相として日蓮が魁をしたのである、その流れを汲んで弟子となり信者となつた「わとうども」即ち日蓮の味方である「わとう」といふのは非常な優しい考へから仰しやつた呼び方で、お前達は皆日蓮を中心にして集つた者である、といふ、親しい意味を置めて仰しやつた、どうぞお前達も日蓮のこの決心に續いて二陣三陣とつづいて「迦葉、阿難にも勝ぐれ、傳教天台にもこ

へよかし」——無論これ等の先輩は尊敬するけれども、併し唯だ先輩の精粕を舐めるのみでは駄目ぢや田舎の譽れを抱いて、迦葉、阿難は立派な人だけでも、それよりも佛敎の爲に功を立て、天台、傳教も偉人であるがその偉人に越へる程なる手柄を爲して行かなければならぬ。斯の如く策勵されたことは茲に又日蓮主義の眞意義があると思ふのである、唯だ先輩に尊敬を拂つて居るだけでは段々小さくなつてしまふ、その敬意は敬意だけれども、それにも越へたる功績を現はさうといふ奮發心と、先人を凌いで更に偉勳を擧げよ、今迄の日蓮主義の歴史にも正義の先輩が踵を接して出て居られるけれども、唯だ先輩に教はつたのみでは駄目ぢや、場合に依れば先に勝ぐれ、先輩に越へたる偉勳を奏しやうとする精神が無くてはならぬ、それを日蓮聖人はお許しに

なつて居る。吾々が慢心で左様な考を抱く譯にはない、日本にこの正法を確立して、個人に於ても國家に於ても中堅を築かうといふ大運動に参加する上には、それだけの拘負決心がなくてはならぬ、この大事を仕上げやうとする時には、命を惜んでは事は成らん、時と場合に依れば一身を犠牲にしても、この正法護持の聖業に参加するといふ決心を持たなければならぬ。それは斯ういふ決心をしたからと言つて、必ずしもその事が起る譯ではないけれども、それだけはモウ鮮かに決心して置かなければならぬ丁度軍人が「死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ」と言はれても、何も自分が生存中に戦争があるか無いか判らぬけれども、戦争がなければその覺悟が要らぬといふものではない、平素に於てその覺悟は入營のその日から有つて居らなければならぬが如くに、法

華行者は信仰の始めより時と場合に依れば命を失つても、この正しき信仰を得たのは命以上の幸福である、今の肉身は何時しか滅び去るものだけれども、永遠に滅びない吾が命は法華經と結びついて永遠の光を得たのであるから、この腐つて行く肉體を保護するか、永遠の光を與へて呉れる教と共に死ぬかと考へた時には、この死すれば數時間を経ない中に鼻向けもならんやうになる肉身に執着するが爲に、永遠不滅の自分の佛性の本である魂の光を現はして呉れる法華經および本佛を忘れて、この腐れ果つる肉身に戀々たることは出来ないか、どうしても是れは思ひ切つて正義の信仰に進まなければならぬといふことを能く自ら觀念して、屢々その事に就て鍛練して、鮮かに心を打定めて置かなければならぬ。さうせぬと幾らでもグラ／＼した精神が出て來

るから、そこで「各々思ひ切り給へ」と言はれたのである。丁度軍人への勅諭にある「死は鴻毛より輕しと覺悟せよ」といふと同じである。それがはつきり定まるのが私は警策の最大な點と考へて居るのであります。思ひ切るといふ事と、先人にも勝る程なる功績を立てよといふ事が、警策箇の中の最も大切な事として、私はこの御書を最後に列ねた次第であります。

尙ほこの他にも數へきれない程澤山結構なる警策に關する聖訓はありますけれども、始めに申した通り簡潔を旨とすること故に、これだけを引くに止めた譯であります。「本經祖書要文」の講義はこれを以て完結と致します。南無久遠實成大恩教主釋迦牟尼佛哀愍救護したまへ、南無妙法蓮華經。(終)

佛 教 と 政 道 (一)

本 多 日 生

緒 言

私の講題は「佛教と政道」といふのでありますがこれはこの會の幹事の方から定めてこの題に依つて話をして呉れるやうにといふ事でありました、それで私はこの講題に就てお話するだけの十分の準備が出来て居りませぬからしてお断りを申したのであります、併しあらゆる方面から政道に關して研究を進めて居るので、不十分にもせよ佛教の側から話をして貰ひたいといふ事でありました、それで餘程考へました、第一私の胸を衝いたのは縦し何か材料を以てお話することが出来ても、釋迦牟尼佛の御精神を果して間違なく御紹介することが出来るかどうか

か、若しもそこに誤りがあり、足らざる所があつたならば、佛教に對して如何にも相濟まぬと思ふたのであります、それが爲めに自分としては非常に苦心をしまして、能ふ限りに調査をして、最善を盡して而して足らない事は己むを得ぬが、たゞ有り合せなお話を申上げては濟まぬ、佛教に對して相濟まぬといふ觀念が非常に強く起りまして、その調査の時間を得たいと希望して居りましたけれども、巡回を繼續して居りまして、漸く十日の夜に九州から歸りました、爾來用事がありましてどうも原稿を作製する時間が十分にありませぬ、昨晩は殆ど徹夜をしていろいろ調査を致しまして、この次の十六日の會までの大體の組織を講成することが出来たのであり

ます、併しまだ自分には不十分に考へるのであります。すけれども、先づ日時も参つた事でありますからして、大體の所感を申上げて置く積りであります。尙ほ研究を繼續しまして他日自分として先づ完全なりと思ふことは、必ずこの講題に就て纏め上げて置きたいと考へて居るのであります。それで初めに「政治の本領」といふことを一寸申して見たい。

一、政治の本領

私の考では政治の本領は理想的の文明を建設し、且つこれを發達せしむるにありと謂へると思ふのであります。その理想的の文明とは國家的組織の文明の中に、國家の活動を理想的ならしむることに於てその目的が達せられるのであつて、若しも國家的組織の文明を斥けて、他の方法に據るならば、到底理想の文明は實現し得ない、他の方法とは宗教のみに依つて文明を造らんとし、又は國家の組織を輕んじ

て所謂社會的に文明を造らんとし、又は他の國家を侵略しやう、武力を以て他國を掠奪して世界を統一するといふやうなる事は容易に實現せられないのみならず、第一實現せられても到底理想の文明に達し得ないものであると信ずるのであります。若しも宗教のみに依つて文明を造らんとするならば、そこに種々なる缺陷を生じて來ると思ふ、それは元來宗教はさやうな形態の文明に關して多くの組織だつた考を持つて居らないのである、基督教に於てこれを見るも、佛教に於てこれを見るも然りて、やはり文明現象の根柢を擔任するにしても、その全部を擔任すべく考へられて居るものでない、キリストその人の理想の中にも、宗教のみに依つて事足れりといふ、宗教萬能の觀念はなかつたと思ふ、釋尊の觀念の中には無論のことであります、それ故に宗教のみに依つて文明を造らんとするならば、却つて種々なる弊害が起つて來ると思ふ、さうして社會の秩序を維持

することも出來ず、又武力を以て世界を統一するといふやうな事は到底不可能な事であると思ふ、然らば社會的に文明を造つて國家といふものを輕んじてやられるかといふと、これ又不可能の事であり、さやうな文明を造つても到底完全な目的點に達し得ないと思ふのである、何故かといへばこの人類には團結して利害を共にする性質を持つて居るが故に、單に社會的に文明を造ると云つても、一方に有力なる團體があつて、さうしてその利益を保護するが爲めに、他を壓して來るからして、世界が一時に社會的の

今は國家を輕んじて社會的に文明を造らんとするが爲めに、頗る貧弱なるものとなつて、何等文明的の進歩を見ることが出來ない、寧ろ非常な逆轉をして總ての文明的現象は破壊され終つた、非常な未發達の狀態に逆戻りをしたやうに見えるのである、さうして内に人民の幸福を保障することが出來ず、外に世界の文明に貢獻することが出來ないのであつて、殆んど委靡振はざる狀態である、これは露西亞に於てのみ然るにあらずして、他の國がこれに倣うても同一の結果を見らると思ふのである。

文明を造ることが出來るならば、或はさういふ事も不可能でないかも知れぬけれども、一方に國家の組織を破つて單に社會的に生存せんとしても、他に國家的の團體を持つて居るものがあつて、その勢力に到底及ぶことが出來ない、それは恰も今の露西亞に於てこれを見ればよく判るのである、露西亞は國家組織の時分には相當有力なる團體であつたけれども

然らば一人の英雄が全世界を武力的に統一して國家の組織が無くなるかといふと、これ又容易に實現されぬ事であり、さやうな事があつたとしても、到底理想的の文明を造ることが出來ない、何故かといへば世界は氣候の上に、地理の上に、歴史の上に人情の上に、言語の上に、いろ／＼な文明現象に於て相違があるのであつて、それを一人の武力的壓迫

の下に統率しやうとすることは不可能であり、且つそれを爲し得ても到底平和を維持することは出来ぬ、秩序を維持することは出来ぬ、始終叛亂が起つて、到底平和を見ることが出来ぬと思ふ、叛亂の中には種々なる苦痛があり、罪惡があつて、到底幸福を企ふる事は出来ぬと思ふのである、それは支那の現状がこれを語つて居ると思ふ、支那はあまりに領土が廣くしてそれを統轄する力が鈍い、時に有力なる英雄が出て全體を押へても、直ぐに破綻を生じて、さうして相互の間に平和が保たれない、始終、衝突叛亂を繰返したことは四千年の歴史が非常によく語つて居る、それ故に世界全體としてこれを考へるならば、支那に出た英雄の數倍の英雄が現はれても、より平和を維持することは困難な譯であつて、到底さういふ事は望まれない事である、それ故にやはり國家的組織に於てその地理人情の異なる所には、相當なる當局者があつて、その國家の獨立を擁

護しつゝ、而もその國家が理想を進めて或る偉大な道の觀念に於て、それが協力して行く、さうして外に國際觀念を高め、人道正義を尊重する、所謂東西相倚り彼此相濟し以て文明の惠澤を共にし、さうして國と國との間に道の觀念に依つてこれを連結し、さうして世界全體の平和幸福を進めて行くといふところが、理想の文明を造る方法であると信ずるのである、さうしてその理想的の國家は内に國民をして各々その所を得せしむるは勿論、十全なる幸福を享受せしむるやうに施設をいたし、さうして各人の天賦の智能を啓發し、徳器を成就し、而して濁りなき歡悅の世界を造り出さなければならぬと思ふのである。

て、この理想的の文明、理想的の國家を造り出すところの政治の本領を果さうとするならば、どこまでも國家の職分を明かにして行かなければならぬと思ふのである、國家は他の壓迫に對抗する力を要

するのは勿論のことであるが、常に他の壓迫に對抗するばかりではいけない、即ち世界に行はれんとする不正不義なることに關しては、それを排除して行く力、さうして正善を實現するところの權威を備へて居らなければならぬものであると思ふ、みづから不正の侵略を恣にするといふが如きことは、無論卑しむべき行爲であり、要するに正義人道を保障する力を以て、存立しなければならぬ、さうしてその力は第一は文化であり、第二は富であり、第三は兵であり、この三ツが完全に發達して行かない限りには、人道正義を保障する力といふものは現はれて來ないものである、又理想的國家が内に職分を完ふすること、即ち安寧秩序を保持し、さうして國民の生命財産を保護する、又信義敦厚の風俗を造り出す、さうして一人の生存に苦しむ者なからしめて各々人生を幸福に感ずるやうにして行くといふには今日經營されて居るところの教育、産業、交通、社

會政策の施設、それらは無論大切であるが、又宗教に依つて人心を感化し、精神的の生活を營ましむる所にまで行かなければ眞に敦厚の俗も現はれず、總てのものが生存を樂しむといふやうなことは出来ぬ、形の方のみに偏しては必ず不平が起り不満が起つて、物質的文明のみに於ては満足せしむること、斷じて不可能であると思ふのである。

そこでこの理想的國家を發達せしむる爲めの政治であると思ふならば、これらの職分を果す根本に於て、政治の理想がなくてはならない、理想的の國家を造るのが政治であるから、政治はこの理想が第一に大切なことになる、若しも低劣なる政治、即ち理想を忘れて或る形以下に於てのみ、政治が働くのちやと考へたならば、そこに非常な缺陷を生じて來ると思ふ、低劣なる政治の中には國際間に不正が行はれ、必ず侵略を企てるやうになると思ふ、さうして内國民に就ては各自が權利利益を目標として争

は、斷じて不可能であると思ふのである。

ふやうになり、全體の幸福を重んずるといふ風が次第に薄らいて行くと思ふ、それは理想を失うて居る政治であつたならば、必ずその弊害が起つて来る。

然るに現在世界各國の政治を見るに、理想的の國家としての發達は極めて幼稚なる有様であつて、政治の全部が低劣なる弊害に陥つて居ると思はれるのである、酷な批評のやうであるけれども、何れの國も眞に理想を尊重して居る政治が行はれて居ないやうに見えるのである、尤も表面には理想的國家の體裁を飾らうとして居るものはあるやうに見えるが、それは虚偽であるやうに考へる、その國民の人格が大體に於て低劣であるが故に、そこで低劣なる政治家が勢力を得て、理想の政治家は排斥せられて居るやうに思ふ、そこで國內の現状としては利益争奪を目的としたる政黨が出来て、その政黨と政黨との間に衝突を繰返す、國際間には外交に術策を弄して、そこに信義の頼み難きものが現はれて来るのである

故に表面は如何に粉飾しても、相互に武を練り、而してその虚を衝かんとする所の觀念は、少しも減じて居らぬのである、今日は四國協商の約束が出来たといふことで、一應は慶賀すべき事にも考へられるけれども、果してどの程度に信頼を置くべきか、それは疑問になつて居ると思ふ、それはやはり表面を飾つて居ることが多いからして、その眞實の程度はどれだけか見極めが六つかしい譯である、又あまり信じ過ぎれば必ず騙されることがある、殊に貧弱なる國家として考へれば、口實は色々あつても、實際には強國の壓迫を受けて居る譯である、國民は利益の争奪に疲れ、遂には思ひべき問題が續出して、外からは文明の惠澤を受けることが出来ない、内には濁りなき歎びの生活を營むことが出来ない、却つて生きながら地獄、餓鬼、畜生、修羅の巷に彷徨する有様である、これは皆政治の本領を誤つて、所謂低劣なる政治に陥つた結果であつて、各國等しくその

病狀が現はれて居ると思ふのである、この誤りを捨てない限りに於ては、各國の人民は次第々に惨苦の淵に沈んで行くのであつて、どの一國も今日の狀態に於ては、露西亞が受けたやうな悲惨を免かれる國はないかも知れない。

二、政治の信用

そこで第二に政治の信用といふことが非常に薄弱になつて參つたと思ふ、その甚だしきは政治を呪うて所謂社會主義を唱へる者が各國に多數生じて居るので、表面は粉飾されて居るけれども、何れの國にも次第に多く政治を呪ふところの人が出来つゝあるのである、無論社會主義は無謀なものであつて、その根據に誤謬を持つて居るのは無論なことであるけれども、併し彼等がさやうな夢に等しいやうな空想を本にして居りながら、次第に勢力を得るといふものは、その主義が善い爲めてなくて、政治の信用が

あまりに失墜した結果である、社會主義の價值あるが爲めに發達するにあらずして、現在各國に行うて居る政治の信頼するに足らざることがあまりに歴々として來た故に、そこでかやうな價值なき主義が勢力を得るのではあるまいか、政治が相當に信用を持つて居つたならば、彼が如き理由なき主義が發達すべくもない譯である、彼は彼の主義の善い爲めに發達するにあらずして、一方の現在の政治があまりに信用を失墜した結果の產物であると考へる、何故政治がかやうに信用を失ふたかといふと、前段に述べたやうに低劣なる政治、それは利益の争奪を目的として居る、さうして互ひに黨派を結んで、多數の勢力を以て我慾を恣にせんとするのである、我慾の政治は金力が唯一の勢力となる、従つて富豪と結ぶ者が出来る、その反對に金力を憎む者が出て來るのである、その怨恨の心が強い爲めに、他の價值ある文明現象をも併せて破砕せんとするのである、それは怨

みと怒りに狂へる人は、總てのものを破壊するのと同じである、その破壊主義が價值が有るか無いかといふ判断から來たのではなくして、あまりに権力と金力とに對する怨恨が強い爲めに、氣が狂うて、亂暴な行動を執るに至つたので、勞働問題然り、社會運動然り、共產主義の發達然りて、これは皆氣の激する所に依り起つて居る現象ではあるまいか、その危険思想にまて走らない者でも、政治を重んずる觀念は次第に減退して來たと思ふ、選挙は種々なる手段に依つて勝敗が決するものであつて、選挙に當選したる者の必ずしも尊ぶべきでないといふことが、餘りに能く知れ渡つた、さうして其處から出た多數の黨派が相結んで不義不正なることを露骨に敢行する、利の爲めには如何なる横暴をも辭さないといふやうな實例があまりに多く示さるゝ爲めに、政治とは利の爲めに黨を組んで横暴を行ふものなりといふやうな風に考へられる、これが爲めに一方には人心

はますます墮落し、勢力を得れば不正も不義も恥づるに足らない、勢力のある所は如何なる不正をやつてもその罪を免れることが出來るといふ考が發達を、政治上から與へたる害毒が彼の教化の效果、教育の効果を破壊して、そこで信義の俗、敦厚の風は地を拂ふに至り、さうして濁り多き不快なる社會を現出するに至つたのであると思ふ、それ故に或る一種の勢力を造つて、即ち多數暴民の力にもせよ、腕力にもせよ、この金力及び権力に對抗して行かうとする考が各國の間に勃然として起つて居ると思ふ、この金力に依つて不正を行ふも、権力に依つて行ふも、多數の暴力に依つて行ふも、不正なるに於ては一である、道の觀念を發揮して、金力にもあれ権力にもあれ暴力にもあれ、不正を行ふものは道に依つて制裁せられるといふ觀念が、人類の中に發達しない限りに於ては、到底政治は今日の墮落より救はれるものでないと思はれるのである。それ故に政治の

大切なる問題は政治の事柄ではなくして、政治に對する信用を恢復するにあらうと思ふ、如何なることを行うても、人民が政治を信用せざるに於ては、到底政治の目的を達することが出來ない、而して政治の信用を回復しやうとするには、今日のやうな低劣なる政治を改めて、理想的の政治に還さなければならぬ、その理想的の政治といふは前段「政治の本領」に於て述べたが如くに、理想的の文明を發達せしめ、理想的の國家を發達するにあるのである、さうしてその理想的の國家には主として第一に徳教を尊重する、さうして人民の人格を向上せしむる、といふ事より出發しなければならぬ、徳教を輕んじて人民の人格が墮落したる時には、如何なる方法を講じても政治の目的を達することは出來ない、然るに多くの政治家は徳教を輕んじ、人格を向上せしむることを忘れて、その以下に政治を行はんとするが故に、今日の政治はすべて低劣の譏りを脱することが

出來ないと思ふのであります。そこで第三に「政治と徳教」といふことが大切な問題になつて來ると思ふ。

三、政治と徳教

水戸の學者相澤正志の「新論」に言うて居ることがある、「人心を一時に鼓舞するものは政治なり、綱紀を萬世に維持するものは名教なり、故に我祖宗の國を肇むるや先づ大經を樹つ」と、これは政治と徳教とを對立的に見て評論したものであつて、政治の方は一時的の作用でその時々が必要に依つて人心を鼓舞作興して行くものであり、徳教の方は萬世に亘つて綱紀を維持するものである、それ故に政治は輕い、徳教は重い、この關係からして我國の皇祖皇宗は國の初めには人心を一時に鼓舞する政治に重きを置き、今日政治はすべて低劣の譏りを脱することが

を置ききになつて、そこで大經を樹てられて、正を

養ふの心を擴めといひ、或は三種の神器をお留めに
なつたのである、いづれもこれは徳教を以て國を治
める本とせらるゝ思召である、この點に於ては政治
は軽いといふことを相澤正志が評論して居るのであ
る。又聖徳太子の憲法發布のときの序に「政を正し
くするの本は學問にあり、學問の本は儒釋神なり」と
示されて居りますが、これは政治と徳教とを一根
と見て斷論を下されたものである、政を正しふする
本は學問にある、學問の本は儒教と佛教と神道であ
る、この三教を離れては學問の基礎が立たぬ、この
學問を離れては政治の基礎が立たぬと言はれたので
これは政治と徳教は根元は一つであるけれども、寧
ろ政治は徳教を根本に置いて行ふべきものだといふ
意味である。又孟子は「其の心に成つて其の政に害
あり、其の政に成つて其の事に害あり、聖人復起る
とも吾が言を易えず」と言つて居りますが、これは
政治は末であつて徳教が本であることを示したので

「其の心に成つて其政に害あり」といふは、一切の文
明的現象は心が本で、心が腐れば社會の現象として
の事實が腐つて行く、社會が腐つてしまへばどんな
政治を行ふた所が、それは役に立つものではない、
それ故に先づその心を養うて社會を向上せしめ、而
して能く政治が行はれるのである、政治は決して萬
能のものではない、人心教化の上に善政が行はれる
ので、教化を用ゐずして政治のみを執るが如きは、
到底その目的を達し得ないもので、さうしてそのこ
とは假令聖人が出興せられても、これには反對をな
さらない、確乎不拔のことだと孟子が斷言をした譯
である。

そこで釋尊の教を説かれたのはやはり孟子など、
同じ考で、政治は末であつて徳教が本だとお考へに
なつた譯で、徳教を生命として居る政治を行はなけ
ればならない、政治は常に徳教から指導を受け、制
裁を受くべきものだとお示しになつて居るのである

それが即ち政治の本領で、政治が徳教と分立して、
たゞ形而下の事に於て行ふべきものだと思ふのは、
政治の生命を失つて居ると思ふのである、この意味
に於て佛教と政道とはそこに關係を生じて來るもの
であると思ふのである、低劣なる政治であるならば

佛教は全然關係を持たない、その政治全體を否認す
る所のものである、社會主義者が否認したり、共產主
義者が否認したりするのは根據は違ふけれども、
低劣なる政治の文明を害し人類に害毒を與へるもの
であるといふことを認むるに於ては一である。(次續)

法華三聖に對する感想

(一)

(文章在於記者)

文學博士 井上哲次郎

今日は此處にあります通り「法華三聖に對する
感想」といふ題で少しばかりお話致して見ようと思
ふのであります、本年は諸君の御存知の通りに聖徳
太子、傳教大師並に日蓮聖人といふこの三人の方を
記念すべき事となりました、丁度同じ年に記念する
やうなことになるました、所々方々に於て或は聖徳
太子に關し、或は傳教大師に關し、或は日蓮聖人に

關して講演會が催されました、私も大分断はりまし
たけれども、それでも己むを得ずやはりそれ等の入
に就て講演を致しました、所が清明會の方に於て丁
度私にも一つ法華三聖に就てお話をして呉れといふ
ことでありまして、それ等の趣意を幾らか總括する
やうな考でお話を致します、最後に法華三聖を記念
するに就ては一つ重大なる意義があるといふことを

お話ししようと思ふのであります、併し中々大きな問題でありますから十分お話が出来ぬや否やそれは疑問であります、殊にこの聖德太子、傳教大師、日蓮聖人といふこの三人は非常に事蹟も多し、又はその教理に關しても中々關係が廣いこととありますから逆も私の知つて居ることだけでもお話は出来ないのてあります、併ながら大體三聖の外形を少しばかり申して、それから最後に感想に移りたいと思つて居ります。

聖德太子、傳教大師、日蓮聖人この三人の方は皆連絡あり系統あり、思想上の關係のあるといふことは、餘程注意すべきことである、第一聖德太子は日本に於て始めて佛教を扶殖された方であり、聖德太子に依つて始めて佛教は日本のものになつたと言つて差支ない、それ迄は佛教の這入ることは這入つて居りましたけれども、まだ本當に能く佛教を理解し、佛教をして我が日本の宗教たらしむる所

ら勝鬘經、ちやんと特筆大書すべきでありませうが、それが書いてない、唯佛像經卷のやうなものを持つて來たと書いてある、これだけでは足りない、どうも歴史に書くのに大事なことを抜かして居る、この時に法華經を百濟の國から真先に持つて來たとあると、随分お話をするにしても一層味合が出ますけれども、書いてない、いろ／＼持つて來たかも知れませぬ、そこは分りませぬけれども、兎に角欽明帝の時に百濟の國が媒介者となつて、日本に佛像と經卷類を持つて來ました、それから御承知の通りいろ／＼排佛崇佛の二派が起りまして、面倒がありましたが、到頭推古帝の時に至りまして時の皇太子即ち聖德太子が本當に佛教を理解なすつて、三部の經文の註解をなされた、この三部の經文は御承知の如く法華經、勝鬘經、維摩經の三部の經文に註解をなされて「義疏」といふ題になつて居る、今日悉く傳はつて居る、況やこの法華經の「法華義疏」なるも

さてには、至つてなかつたと言つて差支ないやうてあります、聖德太子が出られまして始めて佛教の而も大切な經文に註解をなされました、それまで註解などは無論日本にはありません、日本の經典と言へば聖德太子の書かれたものより古いものはない、聖德太子の時にはどういふ經文が日本に這入つて居つたかはつきり分らないのですけれども、種々な經文が這入つて居つたに相違ない、儒教の這入りました時も書物はちやんと書いてあります、「論語」數卷「千字文」一巻、應神天皇の時に這入りました、ちやんと書物の名は書いてあるけれども、欽明帝十三年に佛教が輸入されました時には經文佛像類を持つて來たとはありますけれども、どういふ經文を始めて日本に輸入したか、それは書いてない、甚だ氣の利かぬ話で「正史」に書いてない、「日本書記」に書いて居らぬ、これは書いてなくちやいかぬ、甚だどうも氣の利かぬ話である、法華經なら法華經、勝鬘經な

のは、聖德太子の眞筆が傳へられて居る、これは私自身ではありませぬけれども、同僚の黒板君が確かに見られた、どうも餘程珍しいものです、聖德太子の眞筆書が傳はつて居る、始めて日本に出來た書物が傳へられて居る、それは何とかして特志の人に寫眞版ぐらゐにして弘めるべきであると思ふ、それで三部の經文に註解をなされたが、この三部の經文は中々大切な經文で多くの經文のある中で、この三部の經文だけ註解をなされたといふことは大變な卓見である、いろ／＼な經文が來て居つたに違ひない、その多くの經文の中から太子がこの三部の經文を選ばされた、その中で法華經が主たるものである、人に依つては或は勝鬘經を主とし或は維摩經が主であると言ふけれども、決してさうではない、三部の經文の中で法華經が一番大切なものである、丁度勝鬘經も維摩經も法華經の助けになるべきものである勝鬘經をお選びになつたのは、これは私の考であり

ますが、時の天子は推古天皇であります、女性の方
てあります、それでやはりこの勝鬘夫人は中々賢婦
人である、佛陀の弟子には婦人があります、その勝鬘
夫人は中々賢婦人でありまして悟を開いた人であり
ます、この勝鬘夫人のその悟を書いてある勝鬘經は
中々良い經文で、この經文をお選びになつたのはや
はり總ての婦人の爲めの意味であつたかも知りませ
ぬけれども、直接にはやはり推古天皇の御爲めであ
つたらうと思ふ、さうして維摩經は居士の悟が
書いてあります、居士は即ち聖德太子御自身である
聖德太子は僧侶ではない、僧侶と變らぬ程の御信仰
はありますけれども、併しこれは全く皇太子で在せ
られる、居士の經文としてこの維摩經をお選びにな
つた次第である。それでこの大切な法華經は釋迦如
來本懷の説法である、法華經と勝鬘經と維摩經のこ
の三部の經文をお選びになつたといふ所に非常に大
事の卓見が見える、さうして法華經が主である、さ

うしてこの聖德太子は佛教を日本に扶植なされたの
みならず、餘程日本に適應するやうになされた方で
ある、即ち佛教を日本國家のものになされたと見て
差支ないやうである、又その形蹟は十分には見えな
いやうであるけれども、太子が憲法を制定なされた
ことに依つて、私は十分にそれが言へると思ふ、中
々佛教の信仰に厚い方でありましたが、憲法十七條
なるものは主に國家的の意義を有つて居る、これは
言ふまでもなく、憲法であるからには無論さうであ
りますが、中に佛教に於て關係のあるのは「篤敬三
寶」云々の一條だけで、あとは皆國家の重大事件を
制定されたので、さうして平和主義であります、全
く「以和爲貴」と眞先にありますやうに平和主義
の憲法、上下君臣一致して國家を治むべしといふ、
教育勅語にもう少し立法的の意味のある如き憲法で
あります、非常に大切なもので、あゝいふお考であ
りましたからして、どうも國家的の精神が非常にお

有りになつたことは申すまでもなく、佛教の信仰が
お有りになつたのでも、唯だ宗教といふ一方ではな
い、餘程國家的の觀念があつて、これと佛教を調和
された所を考へますと、佛教を日本化された方
あると斯ういふても差支ないやうである。太子の事
は詳しく人が言つて居りますから、別段茲に申す必
要もないけれども、併ながらも一つ忘るべからざ
ることは、これだけは附加へて置きたいのでありま
すが、日本に佛教の這入りましたのは百濟から輸入
して來たのでありますけれども、聖德太子の時か
らして支那との交通をお聞きになりまして、殊に留
學生を支那に始めて派遣なされたといふ様な事は、
抑々支那から支那の文化を直輸入する道をお聞きに
なつた次第で、これは支那では隋の時であります、隋
唐の間に段々留學生を派遣して、佛教も次第に支那
から大乘佛教を輸入する様になつた次第である、そ
の端緒をお聞きになつたのは聖德太子であります、

聖德太子が佛教を日本に扶植なされまして、それか
ら段々佛教は榮えて來ましたが、奈良朝の時に至り
まして餘程日本の佛教も困つた狀況になりました、
その困つた譯は歴史家が能く説いて居りますから、
私が一々申すまでもない。奈良朝に至りましては勿
論法華經だとか仁王經だとか金光明經であるとか、
さういふやうな經文もありません、大品般若經である
とか、さういふやうな經文も尊ばれて居りましたけ
れども、その他様々な大乘の經文であるとか、小乘
のいろ／＼な經論だとか、さういふものが研究され
ました、澤山支那から書物が這入つて來たものだけ
らして、さういふ方面の研究が盛んになりまして、
さうして聖德太子に依つて法華經が大切な經文にな
つて居つたのに拘はらず、法華經を中心としない考
の佛教徒が、奈良朝には多くなつた次第である、御
承知の如く法華經は大乘の經文、而も大乘の經文中
で最も重要な經文であります、所が奈良朝に於て

は法華經は全然捨てられて居つた譯ではないけれど、餘程法華經を尊ぶ精神が薄らぎまして、法華經とは餘程遠つた小乗の經論のやうなものが大に研究され、又信仰されて、奈良朝にはいろ／＼な小乗の宗派が起つたやうな次第であります。さうしてさういふ方面の研究は随分しましたけれども、大乘の教といふものは、殆んど奈良朝は榮えさせぬ、奈良朝に榮えた宗派は或は全くの小乗の宗派であるとか、然らずんば本當の大乘でなくして權大乘と言ふべき宗派、小乗と大乘の間に權大乘といふ宗派がある、例へば法相宗のやうなもの——さういふやうなものが大いに榮えた、法相宗が最も榮えたやうな次第である、大乘派の宗派として一つあることはあつた、それは華嚴宗である、所が華嚴宗は振はない、やはり人が無かつたやうです、華嚴宗の大切な書物が這入つて來て居つたのでありますけれども、優力な識者がその方面に出なかつた、偉大なる有徳の僧なり

又識者なりがその方面に出なかつたからして、華嚴宗はあることはあつたけれども、これは大乘に相違ないけれども、振はなかつた、さうして今の小乗の宗派若くは權大乘の宗派——最もその時勢力を有つて居つたのは法相宗である。さうしていろ／＼な弊害が起りました、その弊害は一つお話する暇はないが、一二の弊害を申し上げますといふと、政教混合であります、これが一番奈良朝時代の弊害である政治の爲めの佛教、佛教の爲めの政治、これがごつちやになりまして分らぬやうになつた、時に依つては弓削道鏡のやうな者が出て來まして、非常な權勢を以て政權を左右すると共に自分自ら天子にならうとしたくらゐてありますから、これが一番酷かつた併しそればかりではない、その他にも玄昉などといふハイイカラの僧が居りまして、中々危ふないことをやつた、これは餘り素つ破抜いてはいけませぬけれども、實は餘程性質の悪い事もありました、併し遂

に殺されました、太宰府の觀世音の棟上げの時に殺されました。兎に角奈良朝の斯ういふやうなことが桓武天皇の遷都の一つの理由である、奈良は水が悪いといふこともありますけれども、そればかりではない、水の悪いことは初めから分つて居つたのでありますけれども、何が主なる理由であつたかと言へば、どうしても都を遷す外に、この難關を切り抜ける方法は無いといふ、桓武天皇の思召で、桓武天皇は以前から遷都の事は除々計畫されました、どうもその土地を離れるより外任方がない、離れて他に都を拵へて局面を一變するより外に奈良の佛教の弊害を脱する方法がない、桓武天皇は早くこのお考をお懐きになりまして、而も和氣清磨が大いに桓武天皇にこの事を申し上げたやうであります、さうして遂に遷都のお考が起りました、京都に都をお遷しになることになつた次第であります。

廣 告

本多日生親下譯演 統一臨時發售既刊
教育勅語と思想問題

百部以上武蔵朝、五十部以上一割引
 施本用は御相談の上特別の扱とします

監督方教師 山根日東僧正著

日蓮主義百話

本書は著者が嘗て雑誌「統一」紙上に投稿連載せし「機微譯語」の果敢一頁を改題せしもの今後に聖誕七百年報恩の爲に之を上梓し初版は著者有縁の道俗に法施したり今因之を再版に附し賞價を以て頒賣す有教教林として趣味津々たるもの僧も俗も鼓ふて購讀あれ賣切れぬ内。

發 賣 所

統一發行所

東京府荏原郡品川町大字南品川四百十二番地
 振替東京五一〇七一番
 東京市淺草區北清島町十四番地

統 一 團

振替東京二二一九番



思想問題

世界的精神文明の寶庫

中村 又衛

世界の精神文明の寶庫と自稱しつつある佛教徒の

佛教なるもの、將來果してその寶庫は開かるゝてあらうか。佛教の發源地たる印度は脆くも滅びて燦然たりし過去の文明の誇りはわづかに古美術とし遺蹟としてヒマラヤ山頭の雪と併せ賞せられるに過ぎない、また支那文明の生命たりし佛教もまさに印度の後を遂はんとしつつある亡國的の國狀に似、四億の國民の文化的精神とはなり得ないで大山古刹のわづかに殘存するに過ぎない、更に日本の文化が精神的に佛教に負ふ所深大なる事は今更いふまでもないが現代國民の思想の根本基調となりつつあるであらうか、私は印度支那のその如き傾向にむかいつゝあ

るのではないかをあやぶむものである。

佛教全盛の印度が亡び、支那がまた將に亡びんとし、而して日本がその宗教的生命の薄れ行く状態を深大の注意を以て觀たならば、佛教と國家とについてかなり大きい問題は私達の前に提供されて居るやうにもはれる、私は今印度や支那が佛教のために亡國的國狀を來たしたのか、それとも國民の墮落が宗教的生命を失つて自ら現狀を招いたのか、即ち罪は佛教にありや國民性にありや將たまた他に原因ありやの問題は姑くこゝには論じない、とに角、世界文明の誇りたりし東洋の二大國家はあはれな亡國的状态にまで落ち行き、その文化の精神たりし佛教は

わづかに極東の一小帝國たる日本に殘存するに過ぎない、然り殘存である、眞言宗でも念佛宗禪宗でもまた日蓮宗でも殘存的に現代の日本に餘命を持続して居るに過ぎない事は何人も首肯せねばならない事實である。

世界の精神文明の寶庫と自稱する佛教徒の佛教なるものは、あまりにみぢめな現狀にまで下落して居る、恰度維新前に於ける公卿華族のやうなみぢめさで、そして自負自高だけ殘存して居るありさまだ、ただこゝに一縷の頼みとすべきものは、負け嫌いの日本人の特性と佛教教理の深遠廣大のとである、此二が日本の殘存的佛教をして將來の世界人類に、どんな影響を與へるかが興味ある謎である、即ち世界の精神文明の中心たるべき可能性を有する佛教が負け嫌いな敏捷な日本人のすぐれた人物によつて之を世界的に最も新しい形式により紹介され宣傳されるかが、將來の世界文化史上に新しいページに記さ

るべき光榮を荷つて居るのではあるまいか。

現在の狀態ではいかに佛教教理が深遠廣大でも、蘭菊競美の教理があつても開かれざる寶庫で今日の使用にはたりない、まして百弊ことごとく集つて人間の穢いもの見憎きもの、標本かのやうの一部の人は見做されるほど社會の中心から厭離されて居るありさまで、永久に閉ざれたる寶庫となつて埋没して丁う外はない、既成宗團の人達に深い反省と古菩薩のやうな發誓の大菩提心の奮起とを私は熱望せざるを得ないのである。グズとして居ると外國人が却つて心付て此世界の寶庫の鍵を握つて逆輸入的に日本人に目醒むべく教へられるかもわからない。何しても今は大切な時だ、印度支那の二の舞を演じて佛教文化を誇りつつ滅びる國民になつてはならぬ。また自家傳來の寶物を外國人の手によつてその眞價を教へられるやうな衣裏寶珠の貧人になつて居てはならない、どうしても世界的に佛教文化の眞價値

を發揮すべく吾國の佛教徒に依つて此責任づけられたる大使命を果さなければならぬ。

由來日蓮宗徒は自高自負の氣が強い、おれほどゑらいものはないと信じて居る、「諸宗無得道」世界統一の宗教「天から撰ばれた國民」等、かゝる單句を以て綴られて居るのが現代日蓮主義者の文章であり講演であるといつてもいいからぬだ、それほど自ら信じ自ら頼み、自ら負ふところ大なる教徒だ、それに日本人としても負嫌いの特性が可なり濃厚に色づけられて居るから、中には常識的に見たら狂氣じみて居ると見做されることも少くないやうだ、私は日蓮主義の折伏的傳道が與へた弊害の今の日蓮宗徒に殆んど傳統的に、染着して居ることを否定し得ないことだが、さりとてその中の特長を埋没することもできないものだ、ただ望むところは、常識の健全な所有者であつて、しかも熱烈火の如き折伏的信念をもつてもらいたいと期待する。

の傾向に知らずしらず陥つて了う、此意味からして日蓮宗徒は、別して内省的信仰の必要を私は極力出張するものだ。

上に一例として挙げた日蓮宗徒が法華經以外の餘經を輕視し甚しきものは惡魔視するが如きは尤も弊害のひどいもので、これは統一を理想とする佛教徒として早くその弊に陥るらぬやう先輩の方々の明白な指導を切望するものである、御妙判を讀めば、日蓮上人は一切經を所謂わが日記文書と仰られたやうに自在に引用されて居る事が明白だ、法華經は大綱として一切經は網目であるとの一佛教を統一しての見地からすべて根本佛教なる法華經の教旨の發揚に資されて居る、元より純修行として行者の守るべき用意としては題目正行一部助行の截然たる法規はあらうが學問として思想として之を社會人心に及ぼすべき化導法としては本佛釋尊の二代佛經を悉く應用して一として嫌ふべく惡魔視すべきものはない、みな金口

今一例を挙げれば、從來の日蓮宗徒は、法華經以外の經は、みな未顯眞實で、無得道墮地獄の教であるとして、經典そのものをも惡魔視する弊に陥つて居る如きものが甚だ少くない事だ、現に私の如き永い

間、この謬見に囚はれて自分の信ずる經典と信ずる人の著書以外は、殆んど顧みない、たとへ之を手にしても、まづ一種の輕淺の心を以て對する、先入的にその經典、著書に公平な冷靜な且つ眞摯誠實な心持を以てするの用意を失つて居る事だ、恐らくこうして心持は宗教信者の自然に陥り易い弊とおもふ、ひとり日蓮宗徒だけでなく各宗にもまた基督教徒などのものなどにもかなり強くあるやうに見える。

その中でも別して折伏的な戰闘的な修行を課されて居る日蓮宗徒であるから、勢ひ自尊排他的の感情が沁入する事は人間として免れがたい弱點である、而してその弊の及ぶところ黨派的根性が強くもなる統一融歸を教義として豫期しながらすす〜正反對の所説、金玉の光りを放たないものはない、立正安國論の根本思想は法華經にあるも、しかも大集經等の餘經を引用してその材料に組織されて居る如きと

私はおもふ、殘存的なあはれな現佛教の状態であるが今後新しい人によつて新しい研究を佛教に加へられる時は、必ず數多の宗教として一代佛教を組織的にその思想教理信仰を新研究法によつて試みられるであらうとおもふ、むろん古來の先哲高僧の組織的教學も參考とはされやうが、直爾に釋迦の佛教であるから釋迦の思想系統を研究しなければならぬといふ前提が必ず研究者の胸に起るであらう、それはあまりに弊害に包まれた既成佛教の各宗の狀態に先入的に感染されるを厭ふ傾向からしても起らうとおもふ。

新學術新宗教としての新しい精神文明を將來の世界に齎らすべき使命をもつて居るものは日本に殘存

しつゝある一代佛教である、それはなほ寶庫として閉ざされたままである、その鍵は何人の手によつて開かるべき運命をもつかは問ふ所でない、たゞ寶庫の所有者たる既成宗團の佛教徒が、わけて日蓮宗徒が一日も早くその使命の自覺を私は切望してやまないそれにはまづ濃厚に色づけられたる弊害から擺脫しなければ、眞の自覺は現前しない。

私は今夏、本多日生上人の「大藏經要義」をはじめめて讀み、上人の着眼點の遠大なる、宗徒の弊を救ふだけでも法利の大なるを知り、併せて將來の世界的精神文明の使命者に一光明を投げられたる好意を心より感謝した、此一文は「大藏經要義」を讀んでの所感といふわけではないが、多少の因縁はあるので一言附記する、該書に對する貧しい所感は別にまた書くつもりである。

(大正十、十二、八)

記事

泗水の法界 雲川生(寄)

伊勢四日市は多年淨土真宗の世界であつた。由來商業地である四日市には思想とか宗教とか文藝とかに對し無理解ならざる迄も縁なきやの感ある人が多かつた、併し四日市の信仰界としては其の大觀に於て神道にあらざる基督教にあらざる最も勢力あるものは佛教で而も其の佛教中の真宗一派であつた、日蓮宗の寺院も二ヶ寺ありとは云へざるとして振はざるの觀なきを得なかつたが、數年前から滔々として日蓮主義の大波が四日市港頭にも押寄せて來た、そうして最も世界的將又國家的にして最も正しき信仰たる法華經の信仰者たり共鳴者たるものは日に増加した、統一團分團の旗幟は驕り安樂寺は建立されて愈々之を中心とする一大新勢力は蔚然として上下に培植されつゝある、而して其の現はれの片鱗とも見るべきものを少しく報道しよう、願はくば此の「泗水法界便」の爲め貴重なる本誌の一編を割愛せられんことを。

○宗祖御會式の盛觀 日宗の寺院として此の會式を行はざるはない去れど四日市の寺院に於けるそれは極めて平凡なるが例であつた、何等の過仰心も表示されねば歡喜の念も喚起されなれど一片の形式で平凡と謂はむよりも寧ろ無意義に奉行される感があつた、そこで安樂寺では初めての試みでもあるから祖師の志をも體現し我が宗門團體として有力なものが乏しい、而も女人成佛を至難とする他宗門ならばいざ知らず我が日蓮大聖人を眞仰隨喜する日宗として、眞人に對しても愛見に對しても常に家庭の中心となつて活動する婦人が信仰に目覺める上に於て、之れが爲めに活動し盡瘁し力を竭せて進取的氣象を發揮するは思想問題などの兎角噴出せらるゝ際、洵に一大急務であるといふ見地から遂に有力なる智識階級の婦人等も參加し妙教婦人會を組織し、大正十年十一月廿三日恒例に依り本多日主大僧正が安樂寺に於て法華經要義の講演に臨まるゝ當日を機會とし講演に先立ち之れが發會式を擧げた、會名は大僧正に乞ひて其の命名せられし所て法要を嚴修し次で大僧正には此の婦人會の爲め、最も有益にして最も婦人に適切なる趣味多き一場の講演をせられたが次で十二月十二日の夜、第一回例會を兼て役員選定會を催し左の人々を役員に推して外に男子の篤信者を顧問に囑託し將來大に活動する事になつた。

△會長 山路すへ子△副會長 見玉かつ子△幹事 佐藤柳子、小倉せき子、服部たか子、池上たま子、谷村ついで子(會計佐藤、谷村、池上)

尙任本會は毎月十二日安樂寺に於て例會を開き春秋二回大會を催すので入會希望者繰出し近く百餘名に達するであらうと云ふ。

各地の思想戰

◎神戸教報 十一月二十八日於三養内燃機製造所「自愛會の主張」本多親下。△同日於神戸製鋼所「靜かに尊尊を想ふ」本多親下。

を廣宣法布する爲めにもと横徒、統一團員等協力し月こそ幾はれ蓋曆から云へば恰も宗祖大聖人入滅の十月十二日に當る十年十一月十二日四日市沖ノ島安樂寺に於て宗祖の會式が行はれた。素より朝に夕に法要は嚴修され其の間には國友僧正の法話がある、浴道の裝飾された提灯や幟にも清く餘き輝きがあり、晴々とした面に法悦の色溢へられた善男善女は旁乎として愛語の足を廻たぬ、やがて夕の色漸く濃かとなつた午後六時の頃となれば大小の萬燈に火は點せられて行列の一步は踏出れた、晴れたれども風寒き初冬の街に團扇太鼓の音は湧へて七字の題目聲高く道行く人は足を止め家々の軒端には老若立集ひて市中は時ならぬ大賑ひ、此の地方にては曾て見ざる萬燈行列で池上のそれを縮圖にしたやう規模に大小はあるが意氣は旁らぬ一念三千の熱烈な叫び、何事やらんと念佛信者等も目を輝はりて其の光景にしばしは見惚るゝばかり、斯くて壹百に餘る信徒は太鼓も破れよ咽喉も裂けよと題目を高唱しつゝ市中の大通りを一巡して安樂寺に歸る、そこには一般參觀者はじめ何人にも無料て興へし菊霧田樂の湯氣を立てて舞せられるがあり、其の夜は數十名の善男女いづれも法悦に満ちつゝ實前に通夜して東雲の空美しく明け渡る頃しも朝の朝靄に、昔ながらの旭日暁々と昇る時たゞ旭の森のそれならぬを感かとしつゝ追慕の情を懐いて退散した、深き深き當夜の印象は必ずや更らに大正十一年の會式をして一層意義多く一層大規模に執行せしむるに至るであらう。

○妙教婦人會の設立 泗水の法界として更に特筆すべき一新事實は安樂寺所屬の妙教婦人會が設立された事である、統一團員を始め女子の妙教信仰者は既に四日市にても多數を算するが婦人だけの信仰

△二十九日於同所「日蓮聖人に學べ」多現下。△同日於淡東俱樂部公開講演「日蓮主義之解説」本多現下。

◎神戸のはちす婦人會 十二月五日於統一閣神戸支部第八回婦人修養講演會開演「佛陀の婦人訓三」能井本光師「婦の強健法」遠坂醫師。時恰も年末の忙はしき折にもかゝはらず清信の婦人淑女は萬難を排して參會し熱心に聴聞せり。熊井師は過日來風邪の所當會の爲に病床を讀つて講演せらる。遠坂先生の信仰を元にしたる衛生講話は、多年の経験上より割り出したる活教訓的療法にして、宗教の信念が如何に吾々の健不健に影響を及ぼすかを知れり。労働の神聖なる事を今更の如くに覺りたる婦人淑女は、今晚の夕餉の支度等を如何にいそぐと感激に充ちて勵ませし事かと想像せらる。

◎怡智通信 十月七日於市橋宅「釋尊傳九」富田日蓮師。△十二日於松崎本立寺「吾宗の誇り」富田日蓮師。△十六日於本立寺「同會の誇り」富田日蓮師「慈悲の觀念」中島孝治氏「信に活きよ」川崎布教師。△二十八日於實相寺「佛教の正統と日蓮主義」富田日蓮師。△三十一日於赤崎宅「日蓮主義の特長」富田日蓮師。△十一月十一日於本立寺「行者の安心其一」富田日蓮師。△十二日於本立寺「行者の安心其二」富田日蓮師。

◎金澤通信 十二月十八日於本長寺天晴會講演「太平洋會議所感」宮成少佐「涅槃經經王品の一節」窪田純榮師「本尊に就て」本郷常次郎氏。△二十二日於本長寺「現在觀と未來觀」本郷常次郎氏。「三澤鈔の一節」窪田純榮師。天晴會には毎回窪田、石橋の兩師、小島本郷の兩氏講師として熱誠を奮ひ、本長寺例會講演には窪田本郷兩氏主として正信を鼓吹しつゝあり。要するに眞宗の根據地たる當地

に於て、法華を弘むるは難事中の難事たり、然も着々其の效を奏し、あるは勿論佛天の加護の然らしむる所なりとは云へ又各講師信者の熱誠預つて力あるは言を俟たず、吾人は此の聖誕七百年を記念として更に十一年よりは益々勇猛精進、不惜身命の誓願を以て大法の弘通に努力せん事を期せんとするものなり。

◎千葉通信 十二月九日於山武郡首ノ内常覺寺異體同心、△十四日於常覺寺「新講の意義」△同日於同寺「日蓮聖人傳」、△二十五日於同寺「善意に解せよ」、△十九日於同寺「利益とは何ぞ」、△二十五日於家徳山老氏宅婦人會「五しき信仰とは何ぞ」以上中島元道師講演。

◎福崎局の患より 我親愛なる讀者諸兄姉は此の寒さにも負けず、益々御壯健であります。小生は先月病を得て十九日より床に就て了ひました。其のため新年の校正は病床でやりましたが、同人等大奮闘の下に幸ひ年内に發行の出来たのは、喜ばしい次第でありました。然し小生は病氣が長引くので暮に名古屋より東京へ参り、向島の茅屋で幸多かるべき正月をば給んと病床に暮しました。その爲に二月號の編輯が大分遅れ従つて發行も後れましたが、讀者諸兄姉に深くおわび致します。まう全快したので三月號からは大努力を致すつもりであります。(川島)

新寺建立

宗教の勃興して蔚然たる勢力を成す、必ずしも永き歲月を要せず、偉人の出るあり、時運に際會せん

か、一代にして一國を風靡することを得ん、天台の時然り、傳教の時然り。我顯本法華宗は不世出の碩徳、本多大僧正現下を管長として奉載す、教學の卓見に於て、無碍辯の獅子吼に於て、東西奔走の行化に於て、釋迦日蓮以後其の類例を見ず、而して時や世界大戰の後を受けて思想の動搖全世界を振蕩し、我國又た澎湃たる新思潮の波上に漾うて、操舵一度誤らんか覆没の危嶮に脅かさる。此の秋なる哉、日蓮の叫びし「天四海皆歸妙法の宣言を實現し、日本乃至全世界の生靈を日蓮主義によりて教化せんは、果せる哉、新勢力は日に月に我宗に加はる、帝都中央の宣傳に於て、樞要大都市の教化に於て、有識階級の歸依に於て、一般民衆の信仰に於て。而して大教を宣傳すべき道場に就ては、昨大正十年に於て四箇の新寺と、三の教會を得たり、今又大正十一年の初頭に早くも一つの新寺と一の教會を得、宗運の隆昌を報道するの悦を有す。一の新寺とは伊勢國加佐登在

平野村の豪家、昔し伊豆國伊東より移住したる伊東寛氏の寄進せるもの、篤く日蓮の教を信じ、深く本多大僧正に歸依せる同氏は、道の失輩四日市の兒玉小海良氏に諮り、遂に家を舉げて大教宣傳の精舎とし其後半生を捧げて佛門に歸せんとし、大正十一年一月二十五日名古屋なる國友日斌師を請じて、邸宅四百五十坪、建物七十坪、資産良田壹町歩を寄進し一字建立の事を委任したり、かくて本年秋の頃には新しき本堂に新しき大本尊を奉安をすべき晴の大法要は、一向宗に固まりし伊勢門徒の視聽を驚すべきか。新しき教會とは朝鮮釜山に新設されんとするもの、曩に横山惠正師により、天晴地明會の名によりて開拓されつゝありし新領土の教田は、努力遂に空しからず、牢固たる基礎を堅め得たるに依り、茲に顯本法華宗教會所の新設を總督府に出願するに至れるなり。實に大正十一年には幾何の新寺と幾何の教會を我宗に齎すべきか、讀者と共に期待せん哉 (記者)

新寺建立淨財勸募

愛知縣北設樂郡上津村本常寺

新寺建立淨財勸募

愛知縣北設樂郡上津村本常寺



本常寺建立設教地圖

廣告

本成寺建立募緣序

宗教の人生に必要なは事理頗る明白にして誰か復疑を存せんや個人に就て之を見れば人格を向上し精神の不安を除去し以て苦と罪とを解脱せしむ又家庭に就て之を見れば家憲の中軸と成り祖先精靈の常在を信じ以て家庭の生命を尊重せしむ復社會に就て之を見れば信義の風敦厚の俗を維持し以て謙讓の美德を發達せしむ更に國家に就て之を見れば我が國體の尊嚴を信解し忠君愛國の道徳を助長し以て犠牲の大精神を涵養せしむ加之宗教は各人生命の永存を教へて不滅の信仰に立たしむるが故に一切の思想行爲の根本に光と力とを與へ愉悅の生活を拓開し來り縦し物質的には不遇薄命に坐することあるも精神界に國家を建設し所謂一步を行かずして靈山に往復するを得ん斯くて數へ來らば宗教の効果は眞に廣大無邊なり然して各種宗教中最も完全にして且つ尊高なるは佛教に過ぎたるは無し其佛教中に於て最第一たるは實に法華經なり故に曾て聖德太子は

之を撰んで鎮護國家の妙典と稱し傳教大師は之を以て南都六宗を統一し朝野の間法華經の尊信は遙に群典に超へたり日蓮大聖人出づるに及んで更に法華經の心髓を發揮し世界第一の妙宗を創立す之を顯本法華の大教と稱す

茲に如上宗教の必要を自覺し殊に顯本法華の大教を尊信する士女胥謀り三河國北設樂郡上津具村の内清淨の地域を撰んで一寺を建立し之を圓珠山本常寺と稱す此寺は顯本法華の大教を宣布する道場なれば上は佛祖の常護を蒙り下は遠近に法益を流布し由て以て廣大無邊の効果奏せんこと疑なし予此

新寺建立淨財勸募

愛知縣北設樂郡上津村具本寺

擧を聞き遙に之を慶讃し此の募縁序を贈り以て隨喜の意を表す希くは清淨の士女益賛同の志を加へて速に所願を成就せんことを

大正十一年一月七日

顯本法華宗管長大僧正本多日生印

- 淨財寄附申込者芳名
- 一金貳千圓也 顯本法華宗交附金
 - 北設樂郡上津具村字行人原參拾八番の貳拾七 一 山林四反八畝貳拾步 同 人
 - 一畑四畝拾參步 三浦 麻次郎 一 山林貳反八畝步 同 村
 - 同郡同村字木戸ヶ洞拾番ノ四 村松 運平 一 山林貳反八畝步 同 村
 - 一畑貳反步 村松 運平 一 山林貳反八畝步 同 村
 - 同郡同村字下今屋敷九番 三城 佐重 一 山林貳反八畝步 同 村
 - 一畑四畝拾步 同 人 一 山林貳反八畝步 同 村
 - 同郡同村字切畑九番ノ參拾貳 同 人 一 山林貳反八畝步 同 村
 - 一山林貳反五畝步 同 人 一 山林貳反八畝步 同 村
 - 同郡同村字箱淵壹番ノ四拾七 村松 勝四郎 一 山林貳反八畝步 同 村
 - 一山林七反步 同 人 一 山林貳反八畝步 同 村
 - 同郡同村字行人原八番 一田 五畝步 但固定資本 上津具村 長谷川慶次郎
 - 同郡同村字行人原拾四番ノ壹 村松 榮次郎 北設樂郡上津具村字本澤貳拾五
 - 一田九畝四步 村松 十七一 一山林參反七畝步 今泉 玉平
 - 同郡名倉村大字東納庫字大野山貳番ノ參百七 同郡同村字東山貳番ノ百參拾參 依田 龜市
 - 同郡同村字行人原參拾九番地ノ四 同郡同村字行人原參拾九番地ノ四 村松 榮次郎
 - 拾 一山林壹反步 同郡同村字行人原參拾九番地ノ四 村松 榮次郎

本多日生祝下著書一覽

- 法華經の心髓 金壹圓六拾錢
 - 日蓮主義初歩 金七拾錢
 - 日蓮主義 金壹圓五拾錢
 - 修養と日蓮主義 金壹圓五拾錢
 - 國民道德と日蓮主義 金壹圓五拾錢
 - 日蓮聖人正傳 金貳圓貳拾錢
 - 日蓮主義綱要 金貳圓貳拾錢
 - 日蓮聖人の感激 金貳圓貳拾錢
 - 日蓮主義の運用 金貳圓五拾錢
 - 東洋文明の權威 金貳圓貳拾錢
 - 國民教化 金貳圓貳拾錢
 - 戦士の伴 金貳圓貳拾錢
 - 思想問題の歸結と法華經 金貳圓
 - 聖訓要義 各卷壹圓金貳圓貳拾錢
 - 開目抄詳解 上卷一部金貳圓八拾錢
 - 聖語錄 金貳圓八拾錢
 - 優婆塞戒經通解 金八拾五錢
 - 大乘本生心地觀經通解 金八拾五錢
 - 法華經講義 以上各送料一部金八錢
- 上卷下卷各一部金壹圓四拾錢
送料一部金拾八錢

- 大藏經要義 一部金壹圓八拾錢十一卷迄送料不要
- 法華經要文 送料一部金貳錢
- 佛教信仰の正統 送料一部金貳錢

以上購讀希望の方は左記へ申込るべし
東京市外品川町妙國寺内

大藏經要義刊行會

振替東京二一五九六番

料告廣	價定一統
一冊	金壹拾錢
一ケ年	金參圓參拾錢
四分ノ一頁	金參圓半
半頁	金六圓
一頁	金壹圓半

送料一錢
送料共
事の金銭

大正十一年一月廿七日印刷納本
大正十一年二月一日發行

不許複製

編輯所 統 一 編輯所
發行所 統 一 發行所
印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

